

心とは何か (二)

木 曾 好 能

第一章 「心とは何か」(一)の要約(一)

——デカルトの心身二元論とストローソンの「人」の概念——

一 われわれは、「心とは何か」(一)¹において、或る人における心的(精神的、心理的)な状態や活動(事象、出来事)は、本人が体験する内的な側面と、他人が外から観察できる、身体における物理的生理的な側面との、両面を本質的に備えた、単一の事象である(一) 序論、第二章特に十一〜十三節、第四章、二四節、第六章)が、心的事象の内的側面は、その外的身体的側面に還元できない(同序論、十八、十九節、二五節)とする、心身二側面説(the double aspect theory)より正確に言えば心的事象の内外二側面説を、主張しようとした。

われわれは、以上のような心身二側面説を、デカルトの心身二元論(同第一章)、ストローソンの「人」の概念(同第二章)、ウィリアムズの「人」の概念(同第三章)、ルイスの機能主義的心身同一説(同第四章)、デイヴィドソンの「非法的(無法的)心身一元論」(同第五章)、およびジェイムズ・ラッセルの「心理学的心身一元論」(同第六章)を検討することによって、擁護しようとした。

註
(1) 「心とは何か」、『京都大学文学部研究紀要第二十六』(一九八七年)。

以下(一)と略記する。

二 「私すなわち私の精神は、考えるということとその本質とし、私の身体を含むあらゆる物体から独立に存在する、一つの実体である」というデカルトの心身二元論(心身の実在的区別)に対しては、われわれは、「私が考えている」ということを知るためには「身体が存在する」ということを考える必要はないが、このことは、私が考えているということが事実であるために身体が存在することが必要でないということ、意味するわけではない、と考えた。すなわち、精神(心)が事実において物体(身体)なしに存在し得るかどうかは、精神の概念と物体の概念の間に単に認識または意味の上での関係しか含んでいない、「私」の思考や意識の事実からは、決定できない問題であり、二つのものの間の論理的、意味論的、あるいは認識論的な区別(相違、独立性)は、それら二つのもの間の実在的区別(それらの存在が事実においてたがいに独立であること)を含意しない、と考えた(一四節)。そして、圧倒的多数の経験的事実は、考えるということを含む心的活動の主体を、単なる精神ではなくて、身体をもつ人間であると、考えさせるのである。

三 「私」を精神としたデカルトの考えを批判して、「私」を心身の二側面をもつ「人」(Person、人格)であるとしたストローソンの考えを、われわれは、「私が体験する私的な意識状態は、すべて必然的に私のものであるから、それを誰かに属性として帰す必要がない。私が或る意識状態を私自身に帰す必要が生じるのは、それが他人の意識状態でないことを述べる必要がある場合であり、その際には、その意識状態は、場合によっては他人にも属し得るような、私的でない客観的な事象と見なされなければならない」という主張であると理解した(一八節)。従って、或る人が或る意識状態や体験を

彼自身に帰すことができるのは、彼がその種の意識状態を他者にも帰することができる場合に限られる、ということになる。ストロソンは、それが適用される個体が意識をもつものであることを合意し、人間に適用されて真であり得る、「P述語」〔人述語〕(person predicates)、すなわち行為や意図や認識活動を帰す述語)を、「独特の論理的性格」をもつものとした。人述語の「独特の論理的性格」とは、それが、話者がそれを彼自身に彼自身の行動の観察に基かずに(多くの場合何らかの内的体験に基いて)適用する、一人称的用法と、話者がそれを他人にその他人の行動の観察に基いて適用する、三人称的用法との、二つの用法を、本質的に備えたものであり、これらの用法が、まったく同種の特徴をまったく同じ正当性をもってそれぞれに帰すものであるということであった。人述語は、一人称的自帰的用法と三人称的他帰的用法の両方をもつことを、その本質的特徴とし、「M述語」(物体述語(material object predicates)、物体的特徴を帰す述語)の「三人称的」用法、純粹に私的な体験の記述の「非人称的」用法、あるいはそれら両用法の複合の、いずれによっても説明できない。「人」の概念は、このような人述語が適用され得るものの概念として、「根源的」であり、「分析不可能」であるとされた(以上、(一)十一節)。

四 以上のようなストロソンの主張に対して、われわれは、「人」の概念が独自で無類のものであることは認めしたが、それが無類であればあるだけ、われわれがそれをいかにして獲得できるのかが問題となる、と考えた。すなわち、ストロソンの言うような「人」の概念は、われわれ大人のもっている、すでにでき上がった「人」の概念である。生まれたばかりの嬰兒が、そのような完成した「人」の概念を生得的にもっている、と言えるであろうか。そこでわれわれは、人述語の発生(習得)の過程を、思弁的に考えてみた(一)十二、十三節)。

われわれは先ず、幼児が、彼の外的感覚知覚能力(五官)の対象である、外的対象及び外的世界と、彼の身体内的感覚知

覚能力（体性的知覚及び運動感覺的知覚を含む自己受容的知覚能力）の対象である、内的身体（いわば痛みの生じ得る場所）及びその状態とを、生得的に區別できると仮定した。この段階では、外的に知覚されるものはそれだけで論理的に外的対象と見なされ、内的に知覚されるものはそれだけで論理的に「非人称（無人称）的な」内的身体の状態（内的対象）であると見なされるはずであるから、それらをわざわざそれぞれの対象に帰す心的作用は、不必要であると考えられる。この段階では、一つの外的知覚能力（例えば触覚）に現われている或る対象を、別の外的知覚能力（例えば視覚）に現われている諸対象のうちのどれと同一視すべきであるか、という事実問題があるだけである。

しかし、自己の身体は、内的に知覚できるだけでなく、外的に知覚できる外的対象の一つでもある。そこで、幼児は、外的対象のうちの一つを、彼の内的「無人称」身体と同一視するようになる。この事実的な同一視の手掛りは、内的に感じられる彼の内的身体部分の運動と、外的に知覚される彼の外的身体部分の運動との、同時的運動連関にあるであろう。この段階で初めて、無人称的な内的身体的体験を外的対象の一つ（すなわち自己の外的身体）に事実的に帰す心的作用が、必要となる。

さらに、幼児は、彼の内的身体の状態（例えば痛み）とそれに伴う彼の外的身体の状態（傷）及びその振舞いとに、或る人述語（「痛い」）が適用されるのを聞き、この人述語を、その内的身体的体験とその外的身体の状態、特にその内的体験（痛み）に、観念連合によって結びつけるであろう。この段階でも、人述語（「痛い」）は未だ、幼児が内的に感じている無人称的な内的身体的体験及びそれと同一視された外的対象（彼の外的身体の状態）に結びついているに過ぎない。しかしこの段階で幼児は、内外の二側面をもつ単一の無人称的な身体概念を獲得していると言える。

しかし、これと平行して、幼児は、彼の身体以外の外的対象の中で特に注意に価する対象（彼の養育者の身体）の、同じような外的状態（傷や振舞い）にも、同じ人述語（「痛い」）が適用されるのを聞き、その人述語を、内的身体的体験（痛

み)を伴っていないが、それを伴う際の彼自身の外的身体の状態と同様である、その外的対象のその状態に結びつけ、同時に、先の観念連合によって、その状態には彼自身の内的身体的体験と同種の内的身体的体験(痛み)が伴っているものと、想像するであろう。このようにして、彼の身体以外の外的対象にも内的体験が伴うことが想像されるようになる、彼の身体を「自分」とし、他の外的身体を「自分」と同種の存在者である「他人」とする区別が、従って、「自分」と「他人」を含む「人」の概念の形成が、始まるであろう。この段階で初めて、人述語(例えば「痛い」)は、単に彼自身の無人称的内的身体に論理的に妥当するものであること、そしてそれと事実的に同一視されている唯一の外的対象(彼の外的身体)に事実的に妥当するものであることを止め、彼「自身」「の身体」のみならず、「他人」「の身体」にも、事実的に妥当し得るものとなり、世界の内に併合したがいにも区別される客観的存在者としての「自分」と「他人」に同じ正当性をもって適用され得るという意味で、共に客観的な、一人称的用法と三人称的用法とを、獲得するのである。それは、発生論的には、私的で無人称的であった内的体験が、客観的な一人称的事象となることでもある(以上、(一)十二節)。

しかし、その際、事象そのものが変化するわけではなく、われわれが同一の事象を見る見方が発達するだけであろうから、発達後の見地からすれば、人述語は、その適用の手掛りとして、共に客観的であるがたがいにも別個な一人称的内的体験と三人称的外的身体的状態とをもっている、ということになる。従って、人述語(例えば、「痛い」)は、さしあたりは、その述語の適用の内的な手掛り、すなわち客観的な事象である内的体験が、成立していることを意味するが、或る外的身体的状態(単に脳内の神経過程だけではなく、全身体の神経過程を含む全身体の状態)がその内的体験と同一視されるに至るならば、事実において、その身体的状態をも意味し得ることになる。人述語の意味は、以上のような仕方、認識発生論的考察を介して、分析されると言える(一)十三節)。

第二章 再考(一)

— 嬰兒の模倣行動と成人の「人」の概念 —

五 しかし、以上のような人述語及び「人」の概念の分析については、さらに考慮すべき事実がある。それは、生後一週間にも満たない新生児が、養育者の顔の諸部分の運動を真似るといふ事実である。パウアー (T. G. R. Bower) は、この事実を以下のように記述している。

「……「嬰兒の」社会化 (socialization) の過程についての夥しい量の文献がある。それは、嬰兒がどのようにして社会化されるに至るのか、どのようにして自分が人間であることを自覚するに至るのか、どのようにして、彼の環境にある他のものによっては誘発されない、人々に対する特別の諸反応群を、もつに至るのか、という問題を論じた文献である。これらの労作のすべてではないにしても、その多くのものが、無駄であったように思われる。なぜなら、嬰兒は、誕生の瞬間から、彼が人間であることを自覚 (realize) しており、ただ他の人間によってのみ誘発される特別の反応をもっているからである。

このことのもっとも目覚ましい証明の一つは、生後一週間にも満たない嬰兒が、他の人々の真似 (imitate) をしようとするという事実である。母親……が嬰兒に向かって舌を突き出すと、比較的短い時間の後、嬰兒は母親……に向かって舌を突き出し始めるのであろう。次に母親が、舌を突き出すのを止め、目ばたきを始めると、嬰兒は、目ばたきを返すであらう。次に母親が、例えば、口を開け閉じし始めると、嬰兒は、それに合わせて (同期して)、口を開け「閉じし」始めるであらう。……

……嬰兒が、大人が舌を突き出すのを見て、この情報を変換し、その結果、この社会的状況では自分も舌を突き出すべきであるということを知る (know) ということができるためには、信じ難いほどの量の、諸感覚間の先天的な対応づけ (built-in inter-sensory mapping) (諸感覚間の先天的な協調 (coordination))、¹⁾ が、なければならぬように思われる。同じことは、顔に関わるどの模倣 (imitation) についても成り立つ。……

……これらの反応は、特に人間だけに向けられたものであり、新生児が自分をも人間であると見なしている (consider) ことの証拠であると思われる。新生児は、自分の顔が、自分が見ている目の前の大人の顔に似たものであること、自分の口が自分が見ている目の前の大人の口と似たものであることを、或る意味で知っている (know) のである。

……この模倣活動は、嬰兒が母親の真似をするのは、母親にそれ以外の何かをしてもらうためではないという意味で、操作的行動 (an operant behavior) でない。この行動は、それ自体で喜びを与えるものであると思われる。母親と嬰兒は、交わらんがために交わる (interact) のである。私がこの行動を社会的な行動 (a social behavior) と見なすのは、この理由によるのである。¹⁾」

註

(1) F. G. R. Bower, (1) *A Primer of Infant Development*, pp. 28-

30; Cf. (2) *Human Development*, Ch. 14, pp. 304-305. 傍点によ

る強調は、引用者による。以下においても、特に断わらない限り、傍点は引用者による。

六 では、われわれの人述語の分析、さらには「人」の概念の同様な分析は、バウアーの言う「無駄な」努力であるのであろうか。必ずしもそうとは思えない。と言うのは、われわれが思弁的に考えた、人述語の習得に至る発達の各段階を、人述語の適用能力の実際の発生過程と見なさず、むしろ、われわれが人述語を適用する際に実際に与えられ実際に用いられて

いる知覚的情報（手掛り）の処理の仕方、可能的モデルとみなすことができるからである。すなわち、われわれが実際にもっている概念体系以外にも概念体系があり得たのであり、われわれが思弁的に考えた各発達段階に対応して、無人称的な内的体験と外的世界からなる体系、無人称的単一身体とそれ以外の外的対象からなる体系、そして一人称的身体と三人称的身体及びそれら以外の外的対象からなる体系（これが、われわれが実際にもっている、「人」の概念を備えた概念体系である）等が、可能であったと考えられる。われわれの思弁的な発生論的考察をこのように読み替えることによって、われわれの実際的な概念体系が、他の概念体系の前提と異なるいかなる概念的前提をもっているかを、知ることができるのである。

七 しかし、さらに考察を要すると思われるのは、パウアーが嬰兒に対して用いた、「自覚している」、「知っている」、「見なしている」等の表現の意味である。と言うのも、嬰兒の模倣行動は、ただ他の人間によってのみ誘発される、ただの反射運動と考えることができるかも知れないからである。しかし、そう考えるとすれば、直ちに、それらの反射運動がいかにして随意的な、更には意識的な、模倣行動に発達し得るのか、あるいは、一般にいかにして随意的な模倣行動が生じ得るのか、という発生論的な疑問が生じるように思われる。

この問題については、次のように考えることが可能である。すなわち、嬰兒の模倣行動がたとえ反射的な身体運動であったとしても、それは神経生理的過程及び身体的内的体験を伴っているであろう。そしてこの神経生理過程と内的体験とは、後の随意運動において用いることができる知覚的情報（手掛り）がすでに含まれているであろう。嬰兒は、今は、この情報を、現在与えられているすべての刺激「情報」の中から、随意的に識別し抽出して処理することができないかも知れない。しかし、その情報は、現在の全刺激情報の中に現に含まれていると考えられる。嬰兒が徐々に習得するのは、最初から与えられ続けている刺激情報の中での、区別と識別（differentiation）であると思われる。¹しかし、刺激情報のこの識別と処理

のためには、暫定的にであれ、何らかの概念体系が必要であろう。そして前提される概念体系は、色々であり得るであろう。しかし、可能な種々の概念体系の中から、嬰兒は最終的には、われわれが実際にもっている、完成した「人」の概念を含む概念体系を、獲得するに至るのである。嬰兒は、「人」の概念を獲得または選択するための、先天的で生得的な能力をもっていると考えられる。この先天的能力は、最初は、嬰兒の「反射的」模倣運動として現われる。これらの反射運動は、内的体験及び生理過程を伴っており、この内的体験及び生理過程にはすでに、後の随意的模倣に際して用いることができる知覚的情報が含まれている。そしてこの先天的能力が、しかるべき時期に、言語的刺激を含むしかるべき刺激情報を受けつつ、行使され続けることによって、幼兒は、自分が人間であることの認識を伴った随意的な模倣行動の能力、更には完成した「人」の概念を、徐々に獲得することができるであろう。

註

(1) J. J. Gibson, (1) *The Senses Considered as Perceptual Systems*,

p. 259; (2) *The Ecological Approach to Visual Perception*,

pp. 252-254 を見よ。

(2) 「完成した「人」の概念」と言うのは、平均的な大人がもっている

「人」の概念という意味である。個人における「人」の概念は——またその点ではいかなる概念も——おそらく彼の死に至るまで、経験に応じて発達または変化し続けるであろう。

八 われわれは、最初に、人述語及び「人」の概念の発生過程を思弁的にはあるが動的に考察し、それを基にして、人述語及び「人」の概念の静的分析の可能性を示唆した（本稿四節）。次に、新生児における養育者の顔の運動の模倣活動という経験的事実を前にして（五節）、「人」の概念の思弁的動的発生論を、静的哲学的概念分析に、読み替えた（六節）。しかし、新生児の模倣活動という経験的事実を単なる反射運動と解釈する可能性を前にして、われわれは再び思弁的発生論に戻った（七節）。このようなわれわれの議論の動きは、恣意的な言い逃れの連続に見えないでもない。

しかし、哲学的な概念分析は、そもそも何を目指しているのであろうか。或る概念（例えば、「人」の概念）が、いかなる事柄を前提し、他の諸概念といかなる関係にあるのかということの概念分析は、それによって得られた概念間の論理的関係が、実際の人間の認識能力の実際の発達過程の内に何ら対応するものをもたないとすれば、一体いかなる意義を有するであらうか。しかし、哲学的な静的概念分析は、平均的成人のもっている完成した概念体系の中での概念間の関係の分析である。そして、或る概念または概念関係が他の概念または概念関係を論理的に含意または前提するということは、前の概念または概念関係を現実に獲得するためには、後の概念または概念関係を、時間的により先にか、遅くとも同時に、獲得しなければならぬということ、意味するとは限らない。例えば、完成した成人の概念体系の中で、「人間は動物である」という命題が論理的に真である（「或るもの（X）が人間である」という命題が、「そのもの（X）が動物である」という命題を、論理的に含意する、すなわち「動物」の概念が「人」の概念を包摂する）からといって、「人間」の概念を習得するために、より先にまたは同時に、「動物」の概念を習得する必要があると言えるであらうか。或る幼児が、人間以外の動物をまったく見ることなく成長して、「人間」の概念を習得するということが、想像できる。その場合、彼の「人間」の概念は、われわれの完成した概念体系から見れば不完全であるが、彼は、完成した「人間」の概念を習得する途上にあるとも言える。すなわち、人間が知覚的にどのように見えるものであり、どのように振舞うものであるかという、「人」の概念が本質的に前提する知識は、「人」の概念の習得において、同時に獲得されなければならないであろう。ところで、この知識の内には、少なくとも、人間以外の高等動物にも共通する知覚的見かけや振舞いの知識（知覚的情報処理の能力）が、可能的潜在的に含まれているであらう。すなわち、もしこの幼児が、仮定と異なって、人間ばかりでなく動物にも出会うことを経験し続けたとすれば、彼は、「人間」の概念の獲得と同時に、人間を含む意味での「動物」の概念を獲得できたであらう。

また、「人」の概念が本質的に前提する、内的体験と外的対象の区別、自分の身体とそれ以外の外的対象の区別、自分と

他人及びそれ以外の外的対象の区別、のような概念的能力（四節及び六節）は、「人」の概念の習得と同時に、というよりも「人」の概念の習得そのものにおいて、使用あるいは習得されなければならないであろう。

従って、大人の完成した概念体系の中での概念間の本質的な関係は、それらの概念の発生過程に、対応しているように思われる。この意味で、概念間の本質的な論理的関係は、それらの概念を習得した動的発生的過程の、静的モデルである。そうでなければ、平均的成人のもっている完成した諸概念の哲学的分析には、われわれ自身の姿の言わば瞬間撮影であるという以外に、何の意義もないであろう。

九 他方、概念の発生論的考察は、何を目指しているのであろうか。われわれが四節と七節で行なったような概念の発生論は、概念の実際の習得過程を、われわれ大人の完成した概念体系から、理解（了解）しようとするものである。幼児が最初から大人と同じ完成した概念体系を随意的に支配していると考えることができるのであれば、そもそも何の疑問もなく、発生論的な考察は不要になる。従って、「経験的認識の基礎的前提を可能にする超越論的な主観が、自らの計画にのみ基いて、内的表象から対象をアプリアリに構成し、それを外的対象と見なすのである」というような類の観念論には、何の認識論的意義もないのである。どのような先天的概念も、実際の経験的对象に対して適切に使えなければ、何の役にも立たない。そして、どんな先天的概念があるにしても、それを現実の世界において現実の対象に対して今適用することができるためには、特定の手掛り（情報）が今経験的に与えられ、今利用されなければならない。そのためには、その手掛りを現在の全刺激「情報」の中から、区別し、識別し、処理（解釈）しなければならない。そして、情報の識別と処理のためには、すでに何らかの概念体系が備わっていないなければならない。

ところが、嬰兒の認識的あるいは社会的行動は、われわれ大人のそれのように随意的でも意識的でもなく、反射的な運動

であるように見えるのである。しかし、この反射的に見える運動が後の随意的行動と何の繋りももたないのであれば、随意的な認識活動や行動がどのようにして可能になる（発生する）のかを理解する可能性が、まったくなくなってしまふであろう。嬰兒の先天的な概念体系は、彼の反射的な活動を可能にするような機構であり、同時に、この反射的な活動が生理的あるいは内的体験的に与える情報によって徐々に後の随意的な概念体系に成長するような機構なのである（七節）。それゆえわれわれは、われわれ大人の完成した概念体系を基礎にして、それが前提すると思われる他の可能な概念体系を構想し、それらを幼児による概念の実際の習得段階に当てはめて、その習得過程を、意識的に追体験しようとするのである。それゆえ、概念の発生論は、その概念の実際の発生の各段階を理解するモデルとして、可能な概念体系の静的な構想を、必要とするのである。これは、言わば、六節での考察の裏面である。意義のある認識論とは、人間における諸概念の実際の発達過程を、平均的成人がもっている概念体系を哲学的に分析することによって知られる可能的概念体系をモデルとして、具体的に想像し、了解しようとするものであろう。

註

(一) カントの『純粹理性批判』(Kritik der reinen Vernunft) を念頭に

置いている。

第三章 「心とは何か」(一)の要約(二)と再考(二)

——ウィリアムズの「人」の概念——

十 ウィリアムズ(B. Williams)は、ストローソンの「人」の概念を批判して、「人」の概念は、ストローソンの主張するような根源的な概念ではなく、人は、彼の身体そのものであり、従って特殊な物体、すなわち考える物体に他ならな

い」と主張した（「心とは何か」（一）、第三章十四節及び十七節）。ウィリアムズの議論は、ストロークソンも認める二つの前提、すなわち、

(1) 人の身体は物体である、

(2) 或る人の身体に妥当する物体述語は、その人にも妥当する、

ということを前提とする。ところが、

(3) どの人についても、その人の身体に妥当する物体述語の中から適当なものを集めた全体（それらの述語 (M_1, \dots, M_n) を「かつ」(and) で繋いでできる連言 ($M_1 \& \dots \& M_n$) (これをMと表わすことにする)) は、それが妥当する対象を、一つの物体にする、

と言う。実際、デカルトが人間の身体を物体と見なして、人間の精神から区別したように、西洋近世の哲学の伝統では、身体と物体とは同じ語 (body, Korp, corp) によって表わされる。そして、物体の本質は、延長している（空間的広がりをもつ）こと (extension) (デカルト)、あるいは或る空間を占有するという不可入性 (impenetrability) すなわち固党性 (solidity、充実性) (ロック (John Locke)) とされ、これらの特徴は、人間の身体にも当てはまるものであった。Mを例えればこのような特徴とすれば、Mが妥当する対象は、一つの物体であることになる。ところで、Mは、人の身体に妥当するものであったから、(2) によって、人にも妥当する。従って、人は一つの物体であることになる。それゆえ、人は特殊な物体、すなわち考える物体である、とウィリアムズは言う。(同十六節)

われわれは、以上のウィリアムズの議論に対して、(1) の「人の身体は物体である」という前提には、全面的同意を保留した（同十六節）が、人述語がその完全な意味を獲得していく発生論的過程（同十二節（本稿第一章四節））を、それらの述語が自他の外的身体に適用される可能性を獲得していく過程であると見なし、人がその身体そのものであることを、十

分あり得ることであると考へた（同十七節）。

十一 しかし、日本語においては、生きてゐる人の身体が物体であることは、必ずしも自明ではなく、人の身体と単なる物体との両者を共に含むような日常語は、見当たらないように見える。従つて、日本語のような概念体系においては本来、人の身体に妥当するどのような述語の連言も、それが妥当する対象を物体とするには、不十分であるのではないか、と考へられる。それゆゑ、単に延長してゐることや或る空間を占有してゐるというだけでは、その対象が物体であるとは、必ずしも断言できない。では、物体は、生物の身体と異なるかどうか。生物が完全に死んでしまへば、その身体も単なる物体となると考へられるから、物体とは、生命活動を行なわないうで空間を占有するもの、と言へることになる。その際、生命活動を行なわないう特徴は、或る積極的な特徴の単なる欠如ではない。単なる物体に生命活動を加へれば一つの生きた身体になるわけではない。或る物体に真に生命活動を与えるためには、それは物的なあり方とは異なるあり方を得なければならぬ。このように、生命活動を行なわないう特徴は、言葉の上では否定的な特徴であるが、實際は、生命活動を行なう生きた身体のあり方とは別の、或る積極的なあり方である、と考へることが出来る。このように考へるならば、人間や生物の身体は、物体ではないと主張できるかも知れない。

更にまた、或る対象を物体とするような物体述語の連言Mは、その妥当する対象のすべてを物体とするわけではないと言われるかも知れない。すなわち、たとへそのような物体述語の連言Mが、人間の身体を一つの物体すると認めても、Mが、その人に妥当するのは、その人の身体に妥当することから生じる、派生的な用法であつて、人は、依然として、彼の身体とは異なる独自の存在者である、と主張されるかも知れない。これは、ウィリアムズのストローソンに対する批判を、不当とすることにならう。

しかし、この主張は、論点先取の危険を含んでいる。実際、ウィリアムズのストローソン批判は、「或る対象を一つの物体とするような物体述語の連言Mが、派生的にであれ、人そのものに真に妥当するのであれば、その人を身体従って物体でないとする、どういう積極的な理由があるうか」というものである（本稿十節を見よ）。人が彼の身体とは異なる独自の存在者であるということを前提してウィリアムズを批判することは、論点先取になる。しかし、ウィリアムズの議論だけでは、ストローソンの批判としては不十分であり、ストローソンの「人」の概念の「分析不可能性」の議論そのものを再検討することが、必要であったのである（四節）。

第四章 「心とは何か」(一)の要約(三)と再考(三)

——機能主義と内的体験——

十二 ルイス (David Lewis) は、「或る一つのタイプ (種類) の心的状態は、常識によって知られる特定の典型的な原因 (物理的刺激、身体的状態、及び他の心的状態) と結果 (身体的状態、行動、及び他の心的状態) をもつもの、すなわち、或る一つのタイプの因果的な機能を果たすもの (担い手) と定義できる。ところが、この因果的機能を果たすものは、事実において、或るタイプの神経過程である。それゆえ、そのタイプの心的状態は、事実において、そのタイプの神経過程である」と主張した（「心とは何か」(一) 第四章、十八節）。

これに対してわれわれは、「心的状態がその因果的機能によってのみ定義されるのであれば、それは、内的体験を伴うことが必要でなくなる。ところが、われわれは日常、心的状態 (例えば痛み) を、一方では、当人及び他人によって観察できる特定の因果的機能を果たすもの、すなわち、特定の条件のもとで或る種の原因によって引き起こされ、かつ或る種の結果

を生み出すようなもの、であると同時に、他方で、その心的状態にある当人が、内的質的体験（痛みの感覚）をもつようなものであると、考えている。従って、心的状態をその因果的機能に尽きるものと考えることはできない」と反論した（同十九節）。

例えば、痛みについては、或る人が、痛みを感じているのに痛くない振りをしたり、痛みを感じていないのに痛がるということは、あり得るが、これらは、人が痛みを感じるときには特別の理由がなければ痛がるものであり、人が痛がるときには普通は実際に痛みを感じているものであるということを知っている者、すなわち痛みの概念をもっている者がすることである。このことは、「痛み」の概念が、内的質的体験である痛みの感覚と、痛みの原因である刺激や外傷、痛みの結果である痛がる振舞い、及びその他の心的状態とが、たいていの場合に相伴うという事実を前提していることを示している。すなわち、われわれが「痛み」の概念をもっている（獲得し得た）という事実が、痛みの内的体験と痛みの原因や結果とが、個々の場合に相伴わないことはあり得るが、一般には高い確率で相伴うということを、論理的に合意しているのである（同十九節）。しかし、われわれは、われわれ自身においては、それらが相伴うことを経験することがあるであろうが、他人においては、彼の痛みの体験を原理的に直接経験できないために、言語的行動を含む観察される外的身体的振舞い（痛みの因果的機能の一部）を手掛かりとして、それに内的体験が伴っていることを、単に仮定することができる。しかし、同じ理由によって、この仮定に反する事例も、直接には経験できず、またこの仮定を修正する必要も生じないのである（同十九節）。そして、われわれは、痛みについてのこの考察を、心的事象一般に妥当するものと見なした。

十三　しかし、痛みについては、痛みの感覚をその内的質的体験とすることができるとはたして心的事象一般に内的質的側面が伴うと言えるであろうか。

(1) 先ず、すべての個別的な精神的現象(事実)を、「心的事象」と呼ぶことにする。心的事象には、感覺的に知覚すること、記憶すること、想像すること、考えること、信じること、知ること、快苦を感じることに、欲求すること、嫌悪すること、意志すること、種々の感情をもつこと、行為を遂行しながら種々の意識様態をもつこと(知覚もその一形態であるところの、行為遂行的意識)、等々がある。

心的事象としての痛みとは、私が、或る身体的状態にあり、かつ、私の身体の或る部分が痛むことを身体内的に感じる、ということである。身体内的に感じることは内的に体験することであり、内的に体験される痛みとは、内的身体の或る部位が痛むことである。

(2) 知覚することは、精神の現在の現実的な活動であるが、それがはっきりと(顕在的に)意識的である場合と、そうでない場合とがある。例えば、作文をしている今、私は、私の書いてある文が文法的に正しいかどうか注意を集中し、私₁が書きつつある表現をはっきり意識しているが、それ以外の、周囲の騒音状態や、私の姿勢などを、はっきりとは意識していない。それでも、必要があればいつでもそれらをはっきりと意識できるという状態にあり、また、十分に異常な騒音や、十分に異常な姿勢が生じれば、それをはっきり意識するであろう。騒音や姿勢のはっきり意識的でない知覚は、注意に値するほど大きな異常がないということの知覚であり、言わば消極的あるいは否定的な知覚である。しかしそれらはやはり現実の(積極的な)知覚である。自分の姿勢の消極的な知覚が現実の知覚であることは、現在の自分の姿勢を現実₂に知覚していなければ、同じ姿勢を保って作文を続けることができないことから、明らかである。また、音については、覚醒している健聴者には、完全な無音状態は極めてまれである。われわれ自身が音を立てるものであるからであり、われわれは、われわれ自身が立てる音を、行動の手掛りとして₃るのである。「聴覚的自「知覚」(auditory proprioception)」。そして、現在の騒音状態がまったくなくなれば、そのことが、騒音状態の変化として知覚され、行動に変化を生み出すであろう。知覚は本

来環境の变化の知覚であり、環境に「十分大きな」变化がなければ、環境の状態は、すでに知られている通りにあるものと見なされ、はっきりとは意識されなくなるのである。

さて、対象を今ははっきりと意識してはいないが、必要ならばそれをいつでもはっきりと意識できるという精神の状態を、「潜在的意識」と呼ぶならば、知覚には顕在的な知覚と潜在的な知覚とがあると言える。潜在的な知覚が、現実の知覚であることは、それがなくなれば、現在の行動を維持できなくなるということから、明らかである。しかし、潜在的な知覚が顕在的な知覚になるとき、潜在的であった知覚と同一の知覚が顕在的となったのではなくて、別個な知覚が生じたのではないか、と思われるかもしれない。しかし、知覚の内容に十分大きな変化が生じるのであれば、通常はその変化が気づかれるであろう。変化に気づくことがなかったということが、それらの知覚が内容において同じであることを示している。そして、内容に变化のない継起する二つの知覚は、同一の知覚であると規約してもかまわないのである。

(3) さらに対象の知覚それ自体が、対象が知覚者自身とどういう空間的關係にあるかということの知覚を含んでおり、この知覚は、姿勢をも含む自己の身体の状態の潜在的な内的自己受容的知覚を前提している。そして自己の身体の内的知覚(自己知覚)は、一種の自己意識(自覚)にほかならない。従って、対象の知覚は、潜在的な自己知覚を前提しているのである。この潜在的な自己知覚が現実の意識であることは、もしそれが失われれば、対象の知覚に際して適切に行動できなくなるということから、明らかである。

(4) また、私が知覚において対象(作文中の文)を「顕在的あるいは潜在的に」意識しているとき、何を意識しているかを問われればいつでも「私はこの対象を意識している」と答えることができる。この答は、私が対象についての自分の意識を顕在的に意識するに至ったことを表わしているから、対象の意識は、同時にその意識そのものの潜在的な意識(自覚、自己意識)でもあった、従って、対象の知覚は、同時にその知覚の潜在的な意識でもある、と言えそうに見える。

しかし、対象の知覚のこの潜在的な意識（自己意識）も、現実の意識であると言えるであろうか。対象の知覚が前提する潜在的な自己知覚が、現在の行動を支えているという意味で現実の意識であることは、すでに見た（3）。しかし、対象の知覚の潜在的な意識（自己意識）は、どのように現在の行動を支えていると言えるであろうか。それが「私はこの対象を知覚している」と言明するという現在の言語的行動を支えている、と言えるであろうか。むしろ、この言語的行動を支えているのは、対象の知覚の顕在的な意識（自己意識）にはかならないのではないか。そして、この顕在的な意識は、現実的な潜在的意識に先行されることなく可能なのではないか。

しかし、もしそうであるとすると、顕在的な自己意識の対象である、外的対象の知覚が、突如として顕在的に意識されたことになる。そしてその外的知覚は一瞬前の活動であるか、現在の活動であるかの、いずれかである。それが一瞬前の活動であったとすれば、それが現在想起されていることになる。そして、その外的対象の知覚が想起できるということは、それが一瞬前に「私はこの対象を今知覚している」という、現実の潜在的自己意識として、記録されたということになる。また、外的知覚が現在の活動であるとしても、それが新たに生じた活動であるということ（一瞬前にはそのような活動がなかったということ）にも、あるいは、一瞬前の活動と内容において異なるということにも、気づかないとすれば、現在顕在的に意識される外的知覚と内容において同じである外的知覚が、一瞬前に現実に存在したと見なすことができる。そして、（3）で述べたように、その外的知覚には、潜在的な自己知覚（対象の知覚の前提または背景となっている、知覚者の身体の内的自己受容的知覚）が伴っている。そして、この潜在的な自己知覚は、潜在的な自己意識と見なされ得る。

それゆえ、対象の知覚には、その知覚自体の潜在的または顕在的な意識（自己意識）が常に伴っており、顕在的自己意識は潜在的自己意識がはっきりと意識されるに至った（顕在化した）ものである、と考えられる。

（5）対象の知覚には常に同時にその意識の潜在的な意識（自覚、自己意識）が論理的に伴っており、逆に、対象の知覚

の潜在的な意識は常に同時にその対象の知覚を論理的に前提しているのであるから、対象の知覚とその知覚の潜在的な意識とは、別個な活動ではなくて、単一で同一の事象であると思ふことができる。サルトルが「対象についてのあらゆる定立的意識（知覚）は、同時に、それ自身についての非定立的意識（潜在的意識）である」と主張したのは、この事態であつたと思われる。

(6) 以上の議論を要約すると、(2) 感覚知覚は、精神の現在の現実的活動であり、感覚知覚には、顕在的な知覚と潜在的な知覚があり、(3) 対象の知覚は、潜在的な自己知覚を前提しており、(4) 対象の知覚には、常に同時にその知覚の潜在的な意識（自覚、自己意識）伴っており、(5) この対象の知覚は、その知覚の潜在的な意識（自覚、自己意識）と同一の事象である、ということになる。

感覚知覚の内的質的側面は、或る対象がその知覚者に、或るあり方をしてるように、「顕在的または潜在的に、」知覚的（視覚的、聴覚的、触覚的、味覚的、または嗅覚的）に見えることである、と見なすことができる。同様に、自己知覚の内的側面は、知覚者の身体が知覚者に、或るあり方をしてるように、知覚的（内的身体的、自己受容知覚的）に見えることである。

註

- (1) ギブソンの、受動的知覚または環境によって「賦課（強制）される知覚」(imposed perception) に対比される、「能動的知覚」(active perception) または「獲得される知覚」(obtained perception) の考えを見よ。(J. J. Gibson, (1) *The Senses Considered as Perceptual Systems*, Ch. 2-3, pp. 31-58)
- (2) Gibson (1), p. 71 を見よ。
- (3) Gibson (1), p. 37 を見よ。
- (4) Hochberg, J. E., *Perception*, p. 111 : 上村保子訳、ホッホバーグ『知覚』二二五頁を見よ。
- (5) 何を一つのものと思ふかは、恣意的に規約することができる。しかし、内容が同じである継起する二つのものを一つのものと思ふ
- (6) 木曾「直接知覚か非知覚か」第一節二項（四九頁）及び三節（五四〜五七頁）を見よ。
- (7) 註(2)を見よ。
- (8) J.-P. Sartre, *L'être et le néant*, p. 19 : 松浪信三郎訳、サルトル『存在と無』第一分冊、二八頁を見よ。引用文中の括弧内は、引用者が補ったものである。
- (9) 木曾「直接知覚か非知覚か」四九頁における「感覚的意識」に相当する。

十四 記憶するということには、記憶している（覚えている）という意味と、今思い出す（想起する）という意味とがある。今思い出す（想起する）ということは、「顕在的または潜在的な」心的活動であるが、これと区別された意味で記憶している（覚えている）ということは、心的状態である。

今想起するということは、過去の或る事象（或ること）を想起する（remember-that）場合と、過去に習得した或る行動の仕方（いかに為すべきか）を想起（remember-how-to-do）しながら行動するという場合とがある。このことは、或ることを知っていること（know-that）といかに為すべきかを知っていること（know-how）の区別の一例であるが、或ることを知っていることは、多くの場合、言語的行動を含むいかなる行動を為すべきか、すなわちいかに為すべきか、を知っていることに帰着する。

何か過去の事象（または行動の仕方）を想起することが現実に行えるためには、その何かが、過去に知覚において記録（または習得）され、それが把持（または保持）され、それが今再生（または再現）され、それがそれとして「顕在的または潜在的に」再認識されなければならない。これらの条件のうち再認識を伴う再生が、想起にほかならない。

記憶している（覚えている）ということは、何かが記録または習得された後、それが把持または保持されているという心的状態であり、これは、一つの能力（多くの場合言語的行動を含む或る種の行動の能力）をもっていることであるが、その能力の行使（現実態）である想起と区別して、或る種の行動への「傾向」（disposition）と見なすことができる。

記憶しているという「傾向としての」心的状態が意識されるのは、その現実態である「顕在的または潜在的な」想起においてである。従って、記憶しているという心的状態そのものは、潜在的な記憶であろう。他方、想起という心的活動は、潜在的または顕在的な記憶であろう。そして、記憶一般の内的側面は、或る事象または行動を、私がかつてそれを体験したという既往感を伴って「潜在的または顕在的に」意識するということであろう。

以上のような分析を他の心的事象にも適応することによって、すべての心的事象に、「顕在的または潜在的な、しかしいづれにしても」現実の内的質的側面を見出すことができるように見える。しかし、心的事象には、顕在的にも潜在的にも意識されない、無意識の、それにもかかわらず現実的であるようなものがないであろうか。そして、そのような心的事象は、内的体験の側面を欠いたものでないであろうか。もしそのような無意識の心的事象があるとすれば、すべての心的事象が内外の二側面をもっているという主張は、修正されなければならないように見える。しかしその場合でも、決して意識されない心的事象があると考えるべきか、あるいは、すべての心的事象は、原理的に意識化でき、従って内的側面をもち得ると考へるべきかの、いずれかであろう。今は、この問題をこれ以上論じることができない。

第五章 クリップキの二元論

十五 「心とは何か」(一)においてわれわれは、クリプキ(S. Kripke)の考えを、以下のように解した。すなわち、「心的事象の内的質的体験、例えば身体的な痛みの感覚と、脳の神経過程とを同一視するならば、様相論理学の定理に基いて、痛みと神経過程とは、必然的に同一のものであることになる。しかし、その痛みがその神経過程を伴わずに存在することも、またその神経過程がその痛みを伴わずに存在することも、共に十分考へることができ、その痛みとその神経過程の対応は、事実的偶然的であり、従って、その痛みとその神経過程は、同一の事象ではない」(一)十九節)。

この考へに対してわれわれは、われわれの主張するような心身同一説を採れば、心的事象と神経生理過程との同一性が、単に事実の上での偶然的な同一性ではなく、強い論理的必然的な同一性となるということは、クリプキの言う通りであるが、だからと言って、そのことが特に困難な問題となることはないと考えた。すなわち「われわれが或る心的事象に対応する神

経過程を知らない限り、その心的事象がその神経過程と同一の事象であるということは、われわれにとっては偶然的な命題に留まるが、われわれが心的事象が神経過程と同一の事象であることを知り、個々の心的過程と同一の事象である個々の神経過程を知るに至るならば、両者が同一の事象であるということは、必然的な命題となるであろう」と考えた(同二十節)。

しかし、もしクリプキ自身の用語法に厳密に従うならば、われわれは、われわれの考えを、「われわれが二つの事象の同一性を知らなければ、その同一性はわれわれにとってアポステリオリな(経験的な)真理であるが、その同一性は、われわれがそれを知らうと知るまいと、必然的な真理である」と言わねばならない。そして、クリプキによれば、痛みが神経過程を伴わずに存在すること、または、その神経過程が痛みを伴わずに存在することが、考えられる(想像可能である)ならば、両者が同一でないことが可能であり、両者の同一性は必然的ではなく、従って、両者は同一の事象ではないことになる。クリプキにおいては、或ることが可能であるということは、そのことが考えられる(conceivable)すなわち想像可能である(imaginable)ということと同一視され、或ることが必然的であるということは、それと矛盾することが考えられないすなわち想像できないということと同一視されるのである(Kripke (1), pp. 161-3; Kripke (2), pp. 45-6, 62, 113-114, 127)。⁽²⁾ 従って、痛みと神経過程とが同一の事象であるとすれば、様相論理の定理に基いて両者は必然的に同一であることになるから、一方が他方を伴わずに存在することは、想像することもできないということになる。⁽³⁾ しかしこれは事実に反する、というわけである。

そこでわれわれは、クリプキの主張の根拠をより詳しく検討して、「心的事象と神経生理過程とが同一の事象でありながら、一方が他方を伴わずに存在することが、考えられる(想像可能である)かどうか」を考察しなければならない。

註

(1) 本論二十節、特に(12)、(13)を見よ。

(2) Kripke (1), "Identity and Necessity"; Kripke (2), *Naming*

and Necessity, 以下同様。

(3) 註(1)を見よ。

十六 クリプキは第一に、われわれの自然な言語的直観によれば、

(1) 日常語の固有名 (proper names) は、固定的指示表現 (rigid designators) である、と主張する (Kripke (2), pp. 5, 49)。指示表現 (designators) とは、固有名のように、唯一の個物を指示することを意図して使用される表現であり、固有名のほかに、確定記述句 (definite descriptions) がある (p. 24)。確定記述句とは、「古代最後の大哲学者」(the last great philosopher of antiquity) (アリストテレス)、「第四十代アメリカ合衆国大統領」(the 40th President of the United States of America) (リーガン大統領)、「この論文の著者」(the author of this article) などのような、或る条件を充たす唯一のものを指示することを意図して使用される表現である。固有名が固定指示表現であるとは、固有名が、それが現実の世界において指示している対象「同一の対象」を、あらゆる可能的世界 (possible worlds) において指示するということである (pp. 48, 78)。一つの可能的世界とは、考え得る (想像できる) 一つの「可能な」状況 (事態) のことであり、現実の世界 (状況) も、一つの可能的世界であるとされる。従って、固有名 (例えば「アリストテレス」) は、それが現実の世界で或る対象 (アリストテレス) を指示しているならば、その対象が現実とは異なるどのような特徴 (性質と他の対象に対する関係) をもつどのような世界 (反事実的状况) を考えても、その世界で元の対象 (アリストテレス) を指示する、ということになる。更に固有名は、元の対象が存在しないような可能的世界においても、元の対象を指示するとされる。従って、アリストテレスが古代最後の大哲学者でなかったような世界、彼がアレクサンダー大王の家庭教師でなかったような世界、彼がそもそも哲学者とならなかったような世界、「更にはアリストテレスが存在しないような世界、」等々が、可能的世界としてあり、しかもこれらのどの世界においても、「アリストテレス」は現実のこの世界のアリストテレスと同一の人物であるアリストテレスを指示すると言っているのである。

これに対して、確定記述句 (例えば「古代最後の大哲学者」) は、その表現によって記述される条件を充足するような或

る唯一の対象が存在する限り、そのような対象を指示するので、現実の世界ではそれはアリストテレスを指示するけれども、アリストテレスが古代最後の大哲学者でなかったような可能の世界では、別人を指示することになる。それゆえ、

(2) 確定記述句は、非固定的な指示表現 (non-rigid designators) である^②

と言われる (pp. 12, 41, 55, 62)。

註

(1) このことは、様相論理学 (modal logic) において、形式的な論理体系に対する一つの解釈として、可能世界のどれかにおいて存在する対象をすべて集めた単一の対象領域を考え、或る対象が或る可能の世界において或る述語を満足するかどうかを、その対象がその可能の世界に属する (存在する) かどうかに関わりなく、規約するようなモデルを、採ることができるということに基いている。

Hughes and Cresswell, *An Introduction to Modal logic*, pp. 178-9 を見よ。

(2) 日常言語で確定記述句が必ず非固定的に使われると云うのではなくて、多くの場合にそう使われており、また、多くの場合にそう使うことと規約することが便利である、と云うのであろう。

十七 第二にクリプキは、必然性 (necessity) 「及び偶然性 (contingency)」とアプリアリ (a priori) 性「及びアポステリアリ (a posteriori) 性」とを、たがいに独立な概念として区別する。先ず、

(3) 或ることが、現実「の世界」において真であるばかりでなく、あらゆる可能の世界において真であるとき、それは、必然的 (necessary) 「な真理」である、

と言われる (p. 36)。これと関連して、

(4) 或ることが、少なくとも一つの可能の世界において真であるとき、それは可能 (possible) であり、

(5) 或ることが、いかなる可能の世界においても真でないとき、それは、不可能 (impossible) であり、或ること

(6) が必然的であれば、そのことの否定 (not p) が不可能であり、また、或ることが不可能であれば、そのことの否定が

必然的であり、

(6) あることが、必然的でも不可能でもなければ、それは、偶然的 (contingent, accidental) である。

そして、必然的、可能的、不可能的、偶然的の諸概念は、われわれがそれを知っているかどうかに関係なく、形而上学的 (存在論的) な概念であるとされる (p. 36)。これに対して、アプリアリであるかアポステリオリであるかは、われわれの認識に関わる、認識論的な概念であるとされる。すなわち、

(7) 「或る人にとって」アプリアリな真理とは、いかなる経験からも独立に「その人に」知られ得る真理であり、

(8) 「或る人にとって」アポステリオリな真理とは、何らかの経験によって「その人に」知られる真理である。

必然性とアプリアリ性とがたがいに独立な概念であることは、具体例によって示される。必然的でありながらアプリアリでない命題としては、ゴルトバッハ (Goldbach) による、「2より大きい偶数は二つの素数の和である」という、数学において未だ証明されていない「と思われる」推測が挙げられる (pp. 36-38)。すなわちこの推測は、数学的命題であるので、必然的に真であるか、必然的に偽であるはずであるが、未だ誰にもアプリアリに知られていず、また誰かにアプリアリに知られ得るという保証があるわけではないと言っているのである。また、目の前のこのテーブルが何でできているかは、経験的に (アポステリオリに) しか知られない。しかしもしそれが木でできていることが分かれば、それが水でできていることが必然的である。その場合、「このテーブルは水でできていない」という命題は、アポステリオリであるが必然的な真理を表わすことになる (Kripke (1), p. 153)。

またもしわれわれが、アリストテレスを、実際に彼が成し遂げた種々の業績を成し遂げた人として定義し、「アリストテレス」という固有名を、現実の世界でそれらの業績を成し遂げた人が事実において (現実の世界で) それである人自体を、固定的に (どの可能的世界においても) 指示するように使用するとすれば、「アリストテレスはそれらの業績を成し遂げた」

という命題は、われわれがアリストテレスをそれらの業績を成し遂げた人として「ア prioriに」定義したのであるから、ア prioriな真理であるが、アリストテレスがそれらの業績のどれも成し遂げなかったような可能の世界を考えることができるから、必然的な真理ではない (pp. 61-3)。これが、ア prioriでありながら必然的でない命題の例である。この例のような場合、われわれは、「これこれの業績を成し遂げた唯一の人」という、アリストテレス自体にとっては偶然的に妥当する確定記述句によって、「アリストテレス」という固有名の指示対象を、現実の世界においてそれらの業績を成し遂げた唯一の人（それが事実においてアリストテレスである）として「定義により」確定し、その後、この固有名を、あらゆる可能の世界において同一のその対象（アリストテレス自体）を「固定的に」指示するように、使用しているのである、と言われる⁽¹⁾ ((1), p. 156, "Cicero" の例を見よ)。

偶然的でかつアポステリオリな命題の例は、容易に挙げることができる。例えば「一九八七年十二月現在における日本の首相は、竹下登氏である」がそれである。われわれは、この命題が真であることを、経験的事実に基いて（アポステリオリに）知ったのであり、また、竹下登氏以外の人が首相になることもあり得たから、その命題は偶然的に真である。

クリプキは、必然的でア prioriな命題を、「分析的」(analytic) と呼ぶ ((2), p. 39)。分析的な命題としては、当然、論理学や数学で、われわれ自身がそれらを、定義と公理及び定理に基いて（ア prioriに）証明することによって、「それらが必然的に（いかなる可能的状況においても）真であることを」知るに至ったような、諸命題が挙げられるであろう。しかしクリプキは、「ニクソンは人間である」、「このテーブルは一つのテーブルである」、「猫は動物である」、「金は金属である」などの命題をも、分析的な命題と考えていたと思われる。

註

(1) クリップキは、固有名の指示対象を決定するのは、特別の場合を除き、確定記述ではないと主張する (2), pp. 5, 15, 59)。確定記述が固有名の指示対象を決定する特別の場合とは、本文で仮想した「アリステレス」の場合のように、対象の最初の命名 (initial baptism) の際に、固有名の指示対象を確定記述によって決定するような場合である。実際にそのような場合がないわけではない (「海王星」(Neptune) (p. 79) や「切り裂き」[殺人鬼]「ジャック」(Jack the Ripper) (p. 79) の例がある) が、一般には、固有名の

指示対象は、対象の直示 (ostension) か確定記述によって確定された後は、情報伝達の社会的歴史的な因果的連鎖によって、決定されているとされる (p. 59, 91, 93, 94, 106)。固有名が次々と伝達される際に、固有名の受け取り手はそれを、その伝え手と同じ指示対象を指示して使用することを、意図しなければならぬ (p. 98)。そのことによって、われわれが使用する固有名は、その指示対象に遡及できるのである (p. 91)。同じことは、固有名に限らず、固定的に対象を指示するすべての表現にも当てはまる (p. 135)。

十八 第三にクリップキは、

(9) 或る対象が或る属性 (特徴あるいは関係 [「的性質」]) をもつことが必然的である場合、その属性は、その対象の「本質的属性」(an essential property) である、

とする。すなわち、或る対象の本質的属性は、「その対象が或る可能的世界に存在するか否かに関わらず、」その対象があらゆる可能的世界においてもっている属性である (p. 48; 前節 (3) 項及び十六節註 (1) を見よ)。同様に、

(10) ある対象の「偶然的属性」(an accidental property, a contingent property) とは、その対象がそれをもつことももたないことも可能であるような属性である、
ということになる (前節 (6) 項を見よ)。

本質的な属性として、クリップキは、或る個体にとってそれが或る自然または人工の種に属すること (例えば、ニクソンが人間であること (p. 46)、『このテーブルが一つのテーブルであること (p. 115)』、或る自然または人工の種に属する個体にとってそれが或る類に属すること (猫が動物であること (p. 125)、『金が金属であること』、或る物質にとってそれが科学

的に知られた或る組成のものであること（このテーブルが分子からできていること（p. 127）、水がH₂Oであること（pp. 128-9）、金が原始番号七九の元素であること（p. 125））、或る自然現象にとってその正体が科学的に知られた或る事象であること（光が光子の流れであること（pp. 129-31）、熱が分子運動であること（pp. 131-2）、稲妻が電気であること（p. 132））、或る物にとってそれが或る素材でできていること（このテーブルが木でできていること（pp. 113-4））、或る個体にとってそれが或る起源を有すること（エリザベス二世がその実際の両親から生まれたこと¹（pp. 112-3））、或る個体にとってそれが実際に存在した期間に存在したこと（アリストテレスがB.C. 三八四〜三二二年に生存したこと²（p. 62））、等々を考えていると言える。

しかし、われわれが常識において対象に結びつけている属性は、その対象の単なる見かけであり、その対象にとって偶然的な属性であると見なされる。例えば、アリストテレスにとって、プラトンの弟子であったこと、アレクサンダー大王の家庭教師であったこと、彼が実際に成し遂げた種々の哲学的業績を成し遂げたこと、哲学者であったこと、等々は、偶然的な属性である（十六節及び前節のアリストテレスの例を見よ）。また、金にとって黄色いことは偶然的な属性である（pp. 118-9）。また、『オクスフォード英語辞典』には、虎（tiger）が、「大きい、肉食の、四足の、たてがみのないネコ科の動物で、茶色がかった黄褐色に黒い縦じまが入った胴をもち、腹が白い」と記載されているが、これらの特徴のうちで虎に本質的な属性は、おそらくネコ科の動物であることだけであり、（前段落及び（2）、p. 125を見よ）、その他の属性はすべて偶然的属性であり、猫に見かけが似ているという特徴さえ偶然的であるとされる（pp. 119-21）。

註

(1) エリザベス二世がその実際の両親から生まれたことが、エリザベスにとつては必然的であるとしても、その両親がエリザベスをもうけたことは、彼らにとつて偶然的であるように思われる。ここに、一項述語 (F)(x)(y) で表わされる性質でも、多項述語 (F)(x₁, …, x_n) で表わされる関係でもない、[F_{rel}](x) とでも表わすべき「一項述語で表わされる、関係的性質を認める必要があるように見える。

(2) アリストテレスが実際より長生きしたということが、想像できないであろうか。また、現時点で生存している人物を固定的に指示する表現は、その人物をいつまで生存するものとして、現時点で指示しているであろうか。その人物が生存するであろう限り生存するであろうものとして、指示している、と言ふべきなのであるか。

十九 第四にクリプキは、自然の種を表わす一般名辞〔猫〕や〔虎〕のような加算名詞 (countable nouns) や、〔水〕や〔金〕や〔数7〕のような非加算的名詞 (mass nouns) や、自然現象を表わす一般名辞〔熱〕、〔光〕、〔稲妻〕等は、固有名のように、あらゆる可能的世界において、それらが現実世界において指示するのと同じのもの (或る種類の個体や物質や自然現象自体) を、〔固定的に〕指示すると主張する (p. 134)。

二十 第五にクリプキは、

(11) 非固定的指示表現である二つの確定記述句の間の同一性の言明は、偶然的真理であり得るが (pp. 98, 143-4)。

(12) 固有名詞など、二つの固定指示表現の間の同一性の言明は、もし真であるならば、必然的に真である (pp. 108, 140, 143-4)。

と主張する。例えば、「二焦点レンズの発明者」と「アメリカ合衆国の」初代郵政長官は、現実世界においては、共にフランクリン (Benjamin Franklin) を指示する確定記述句であるが、固定指示表現ではなく、二焦点レンズの発明者が初代郵政長官でなかったような可能的世界を考えることができるから、「二焦点レンズの発明者は初代郵政長官である」とい

う同一性の言明は、偶然的な真理である (p. 98)。またこの命題は、現実世界において、経験的事実として真であるのであるから、アポステリオリで偶然的に真である命題である。これに対して、「キケロ」(Cicero) も「トゥリウス」(Tully) も、固有名詞であり、どの可能的世界においてもキケロその人を「固定的に」指示するから、「キケロはトゥリウスである」という命題は、必然的な同一性の言明である (p. 101)。そしてわれわれは、キケロとトゥリウスが同一人であることを、経験的にのみ知り得るから、この命題は、アポステリオリで必然的な命題である。また「宵の明星 (Hesperus) は明けの明星 (Phosphorus) である」という同一性の言明も、アポステリオリで必然的な命題であるとされる (pp. 102-4)。「宵の明星」(Hesperus) も「明けの明星」(Phosphorus) も、金星 (Venus) を固定的に指示するからである。

(12) の、「二つの固定指示表現の間の同一性が必然的な同一性である」ということは、論理的に証明される。そのために、まず、「すべての対象がそれ自身と同一であること ($x \parallel x$) が必然的に真である ($\square (x \parallel x)$)」ということが、前提される。次に、「或るもの (x) と或るもの (y) とが同一の対象である ($x \parallel y$) とき、一方 (x) について真である任意のこと ($A(x)$) が、他方 (y) についても真である ($A(y)$)」ということが前提される。今、 $A(x)$ として $\square (x \parallel x)$ を採れば、 $A(y)$ として $\square (x \parallel y)$ を採ることになる。従って、

(13) 或るもの (x) と或るもの (y) とが同一の対象である ($x \parallel y$) とき、 $\square (x \parallel x)$ が前提されているから $\square (x \parallel y)$ が真である、すなわち、 $x \parallel y$ であることが必然的に真である、

ということが帰結する ((1), p. 136)。

註

(1) Kripke (1), p. 136; Hughes and Cresswell, Ch. 11, pp. 189-90

を見よ。

二一 クリプキは、われわれが本論において主張してきたような、⁽¹⁾心的事象（例えば痛み）と中枢神経系の生理過程との間の同一性の主張を、前節（12）の、二つの固定指示表現の指示対象の間の、アポステリオリであるが必然的な、同一性の言明の例であると考ええる。そのような言明としては、ほかに、前節で挙げた、宵の明星と明けの明星の同一性の言明、また「熱は分子運動である」というような科学理論的同一性の言明が挙げられる（十九節及び十八節、また（2）、pp. 131-2 を見よ）。

これらの言明に共通することは、それらが必然的な同一性の言明であるから、心的事象が生理過程でないこと、宵の明星が明けの明星でないこと、また熱が分子運動でないことが、不可能であり、従って、そのようなことは考える（想像すること）もできないはずである、ということである。なぜなら、もしそのようなことが考え得るのであれば、それらのことが可能であり、従って、それぞれの同一性は必然的でなくなり、それゆえ、「それらの同一性の言明は、二つの固定指示表現の間の同一性の主張であるから、」それぞれの同一性は、現実の世界において偽である、ということが帰結するからである（十五節及び二十節（12）、（13）に依る）。

註

(1) より正確に言うならば、心的事象の外的身体的側面は、単に脳または中枢神経系の生理過程であるとは思われない。それは、それと同時に生じている全身体の生理的及び行動的な諸状態の全体であると思われる。心的事象の主体は、人（人間）である。ところが、心的事象には、単なる意識様態ばかりでなく、行為遂行的意識（本質的に行為に伴うような意識や思考）が含まれる。例えば、実際の知覚

は実は行為遂行的意識であり、また現在の作文という私の行為も、手で文字を書くという行動において成り立っている思考である。そして行為遂行的思考の主体は、行動する身体的な存在者としての人（人間）である。それゆえ心的事象は、原理的に、身体的存在者全体のあり方であることが、可能でなければならぬ。

二二 しかし、これら三つの同一性の言明はいずれも、真であるとすれば必然的に真であるはずであるにもかかわらず、

その否定を考える（想像する）ことが可能であるように、従って、必然的な同一性ではなくて偶然的な同一性であるように、見える。そこで、クリプキは、これらの同一性の各々について、その見かけの偶然性が、単なる見かけによる錯覚であることを、示さなければならぬと言う。

宵の明星と明けの明星の同一性については、「宵の明星が明けの明星でないということがあり得た」ということが可能であるかのように見えるが、実はこのことは不可能であり、想像することもできないはずである。正確に言うならば、われわれが実際に想像でき、またそれと気づかずに実際に想像していることは、「宵の明星が明けの明星でないということがあり得た」ということではなく、「宵の明星が占める位置を夕方に占める或る天体があり、また、明けの明星が占める位置を明け方に占める或る天体があり、これらの天体が別個な天体であることがあり得た」（ただし、一方が事実において金星であつてもよいが、両方が金星であつてはならない）ということなのである（(2), p. 143）。われわれがこれら二つの別個な命題を取り違えるのは、後の命題の述べている事態が、宵の明星と明けの明星についてのわれわれの実際の認識状況と、質的に同一で区別できない別の或る「可能な」認識状況 (a qualitatively identical epistemic situation) であるからである (pp. 103-4, 142-3)。このことは、われわれが、「宵の明星」と「明けの明星」の固定的な指示対象（宵の明星そのもの（アポステリオリな事実として金星である）と、明けの明星そのもの（アポステリオリな事実として金星である））を、或る時刻における位置という、それぞれの偶然的な特徴によって決定したということによる（十七節での「アリストテレス」の例を見よ。(2), pp. 143-4)。というのは、見かけは現実の宵の明星と同じ時刻に同じ位置に現われるような別の天体があり得たであろうからであり、また、見かけは現実の明けの明星と同じ時刻に同じ位置に現われる別の天体があり得たであろうからである。

熱と分子運動の同一性のような、二つのタイプの事象の間の科学理論的同一性についても、同様である。「熱が分子運動

である」という同一性の言明は、必然的に真であるから、「熱が分子運動でないこともあり得た」ということは、不可能なことであり、想像もできない。われわれが実際に想像でき、またそれと気づかず実際に想像していることは、「熱が分子運動でないこともあり得た」ということではなくて、「われわれに熱と同じ感覚を与える或る現象が、分子運動でないことがあり得た」ということなのである。われわれがこれら二つの別個な命題を取り違えるのは、後の命題の述べている事態が、熱についてのわれわれの実際の認識状況と、質的に区別できない或る別の可能な認識状況であるからである。このことは、われわれが熱を、その偶然的な特徴によって、すなわち、偶然的な存在者であるわれわれ人間に熱が「熱の感覚」と呼ばれる或る独特の感覚を与えるという、熱にとって偶然的な事実によって、アポステリオリに同定したという事実依る (pp. 151-2)。というのは、分子運動としての熱とは異なる別の自然現象 (例えば音波) が、熱がわれわれに実際に与える感覚を与えるということが、あり得たであろうからである。

二三

(1) 痛み「を感じる」という種類の心的事象が或る種類の「物理的」生理過程 (例えば、C神経繊維が刺激されること) と同一の事象であるならば、「痛み」も「この種の生理過程」も共に或る種類の対象を固定的に指示する表現である ((2), pp. 148-9; (1), pp. 161-2) ので、その同一性は必然的な同一性であることになり、痛みがその種の生理過程を伴わずに生じることも、その種の生理過程が痛みを伴わずに生じることも、不可能であり、想像できないはずである。しかし、痛みがその種の (しかるべき) 生理過程を伴わずに生じることも、その種の (しかるべき) 生理過程が痛みを伴わずに生じることも、可能であり想像できるように、見える。心身同一説を主張するためには、この見かけの可能性が単なる見かけに基く錯覚であることを、示さなければならぬ。

(2) そのためには、私が痛みを体験する場合と質的にまったく同じでありながら、私の体験しているものが痛みとは別の或る体験であるような認識状況（実際は痛みと別のものでありながら、痛みと質的に同じであることによって、それがかかるべき生理過程を伴っていない痛みであると錯覚される状況）が可能であるか、あるいは、私が痛みを体験しない場合と質的にまったく同じでありながら、私の体験しているものが実は痛みであるような認識状況（実際は痛みでありながら、痛みを体験しないことと質的に同じであることによって、それが痛みを伴わないしかるべき生理過程であると錯覚される状況）が可能であるか、でなければならぬ。

(3) もしそうでなければ、少なくとも、しかるべき生理過程を対象として確定する場合と質的にまったく同じでありながら、対象として確定されるものがしかるべき生理過程とは別の或る種の生理過程であるような認識状況（しかるべき生理過程が痛みを伴っていないかのように錯覚される状況）が可能であるか、あるいは、しかるべき生理過程ではない対象を確定する場合と質的にまったく同じでありながら、対象として確定されるものが実はしかるべき生理過程であるような認識状況（痛みがしかるべき生理過程を伴っていないかのように錯覚される状況）が可能であるか、でなければならぬ。

(4) しかし、クリプキは、これらのことは不可能であると言う。(2) で述べた可能性が成り立たないのは、「痛みがあるのと」「質的に」同じである認識状況に在るということとは、まさに痛みがあるということであり、痛みがないのと「質的に」同じである認識状況に在るということは、まさに痛みがないということである。それゆえ、物理的（生理的）状態とそれに対応する「心的」状態との間の結びつきの見かけの偶然性は、熱の場合のように、何らかの「認識上の」質的な類比物によっては、説明され得ない」(2), p. 152) からである。すなわち、「痛み」は、「宵の明星」や「熱」の場合と同様に、その対象（痛みそのもの）を固定的に指示するが、「宵の明星」や「熱」の場合と異なって、その指示対象（痛み）を、その対象の本質的属性である「痛みであるということ」によって、決定（確定、同定、あるいは識別）しているのである。

従って、われわれが実際に痛みを同定する場合と質的に同じ認識状況で同定される或る現象は、一つの痛みにはかならない。それゆえ、「痛みが同定されるのと質的に同じ仕方でも同定されるが、実際は痛みとは異なる、別の或る現象が、しかるべき生理過程を伴っていないことがあり得た」ということは、想像できず、不可能であることになる。すなわち、われわれに「痛みがしかるべき生理過程を伴わずに存在する」ということが可能であるように見えるという見かけの可能性を、単なる見かけに基いた錯覚として説明できない、ということになる (pp. 152-3)。「しかるべき生理過程が痛みを伴わずに存在する」ということが可能であるように見えるということについても、同様である。それゆえ、痛みがしかるべき生理過程を伴わずに存在することも、しかるべき生理過程が痛みを伴わずに存在することも、想像可能であり、実際に可能であるということになる。すなわち、痛みと生理過程とは、同一の事象ではないということになる。

(5) クリプキは更に、(3) で述べた可能性も成り立たないと考えている。「……われわれがそれら(痛みとしかるべき脳状態(生理過程))を識別する仕方——すなわち、それが或る種類の体験であることによつて痛みを「識別し」、また、それが或る物質的対象であることすなわちこれこれの分子配列であることによつて脳状態を「識別する仕方」——であると思われる仕方は、共に、それぞれの対象を、偶然的にはなく本質的に識別する。すなわち本質的属性によつて識別する。分子が実際にこの配列にあるときは、常に、特定の脳状態が実際にあるのである。人がこのようなものを感じるときは、常に、痛みが実際にあるのである。」(1), p. 162)

第六章 クリプキ的二元論の批判

二四 心身同一説を主張しようとするならば、われわれは、クリプキの議論の諸前提を承認する限り、心的事象「の内的

側面」がしかるべき生理過程を伴わずに生じ得るように見え、しかるべき生理過程が心的事象「の内的側面」を伴わずに生じ得るように見えることが、単なる見かけに基く錯覚であることを示さなければならぬ(二二、二三節)。あるいは、クリプキの議論の諸前提のうちの或るものを否定することによって、今述べたように見える事柄を、不可能な事態ではあるが想像可能な事態であることを、示さなければならぬ。われわれは、クリプキの議論の諸前提と結論に対する、直観的な疑問を列挙することから始めよう。

第一に、クリプキは、或る事態が「形而上学的に」可能であることを、それが考えられ得る (conceivable、思いうかべられ得る) ことすなわち想像され得る (imaginable) ことと同じことであるとしている(十五節)が、われわれが考え得る想像し得ることは、可能なこととは範囲が一致せず、われわれは、矛盾した不可能なことをも考え得るのではないであろうか。実際、われわれはしばしば、矛盾した不可能なことを、そうとは知らずに可能であるかのように考えることがある。また、帰謬法という論法は、「或る命題 (p) からたがいに矛盾した命題 (p & ~p) が生じる場合には、その命題 (p) は偽である」という規則であるが、この規則の具体例であるような文の全体は有意味で考え得るものであり、従って、その文の部分である矛盾命題 (p & ~p) も有意味で考え得るものであるのではなからうか。また、帰謬法を持出すまでもなく、われわれが或る不可能なことを不可能であると考えているとき、われわれは、その不可能なことを不可能であることとして、考えているのではなからうか。

われわれが矛盾した不可能な事柄をも考え得るのであるとすれば、その場合、考え得ること、想像し得ること、すなわち有意味性の判定基準は、それを表現する文が統語論的な形成規則 (syntactical formation rules) に適合していること、すなわち文法的である (grammatical) ことであると、考えることにならう。しかし、文法性 (grammaticality) も一義的ではなく、記号論理学の形成規則に従って得られる式に対応するような文、すなわちその内に現われる品詞の結合関係が

文法的であるような文を、すべて文法的と見なすような、弱い文法性と、或る言語の個々の語がそれぞれ固有の「文法的規則」(語の意味に基礎をもつ統語論的な結合規則)をもっており、その内に現われるすべての語の従うべき「文法規則」をすべて同時に充足しているような文を、文法的な文と見なすような、強い文法性¹⁾とが考えられるであろう。しかし、文法性をこれらのいずれとするにせよ、或る文が文法的であり必然的な命題を表わす場合、その文の否定文も文法的であろうから、この否定文は、不可能ではあるが有意味で想像可能な命題を表わすことになる。

註

(1) 例えば、「この石は死んだ」あるいは「四つ一組性が遅延を飲む」(quadruplicity drinks procrastination) というような文は、弱い意味では文法的であるが、強い意味では文法的でない。後の例は

パートランド・ラッセルのものである (B. Russell, *An Inquiry into Meaning and Truth*, Ch. 13, p. 170)。

二五 第二に、十六節註(2)で示唆したように、日常言語の確定記述句がすべて必ず非固定的な指示表現であるとは限らない。むしろ、日常言語では、非固定的に使われるような指示表現はまれである。クリプキが固有名を固定指示表現であると主張する場合、彼が主張していると思われることを、「固有名、例えば「ニクソン」は、ニクソンが実際に(事実において、すなわち現実世界において)それである対象そのもの(自体)(*the object in itself which is in fact Nixon*)を指示する」と表現することにしよう。「ニクソンが実際にそれである対象そのもの」という表現は、厳密には、クリプキの言う意味での固定指示表現でないかも知れない。他方、彼が、確定記述句を非固定的指示表現であると主張する場合、彼の主張していると思われることを、「確定記述句、例えば「二焦点レンズの発明者」(*the inventor of bifocals*)は、各可能的世界について、その世界で二焦点レンズを発明した或る唯一の人(*a man who uniquely satisfies the conditions of...*)を指示する」と表現することにしよう。クリプキの考えは、確定記述句は、各可能的世界において、その記述に適合するよ

うな或る唯一の対象を、純粹に記述的に指示しようとする、というものであると言つてよい。

ところで、「二焦点レンズの発明者は、「アメリカ合衆国の」初代郵政長官である」という文を聞いたとき、われわれは通常、「二焦点レンズの発明者」(*the inventor of bifocals*)を、他の可能的世界では誰であるか分からないような意味で、「この現実の世界で」二焦点レンズを発明した或る唯一の人」(*a man who uniquely satisfies the condition of having invented bifocals*)とは解さず、「二焦点レンズを実際に(現実のこの世界で)発明した人」が実際に(事実において)それである人」そのもの」(*the man in himself who in fact invented bifocals*)と解していると思われる。^①「初代郵政長官」についても同じである。というのは、われわれは、「二焦点レンズの発明者が初代郵政長官である」ことを知るに至れば、「二焦点レンズの発明者」によって初代郵政長官でもあった人そのものを理解するのであり、「初代郵政長官」についても同様であるからである。また「二焦点レンズの発明者も初代郵政長官も実はフランクリンである」ということを知るに至れば、「二焦点レンズの発明者」と「初代郵政長官」によって、フランクリン「が実際においてそれであった人」そのものを理解するのである。

もちろん、われわれが、二焦点レンズの発明者が初代郵政長官であったことを知つていながら、「二焦点レンズの発明者が初代郵政長官と同一人物でないことがあり得た」という反事実的な思考を行なうことがあり得る。このような場合には、われわれが考えていることは、「[現実世界において]二焦点レンズの発明者「が事実においてそれであった人」そのものが、或る可能的世界において初代郵政長官である唯一の或る人でない」「ことがあり得た」、あるいは、「[現実世界において]初代郵政長官「が事実においてそれであった人」そのものが、或る可能的世界において、二焦点レンズの発明者である唯一の或る人でない」「ということがあり得た」、あるいは、「或る可能的世界において、二焦点レンズの発明者である唯一の或る人が、初代郵政長官である唯一の或る人と、別人である「ことがあり得た」のいずれかであり、われわれは、「二焦点レン

ズの発明者」及び「初代郵政長官」という確定記述句の少なくとも一方を、非固定的指示表現として用いていると言うことができる。

註 (1) 確定記述句をこのように解することが可能であるということについて

ては、Hughes and Cresswell, p. 191 を見よ。

二六 第三に、私の前に私の小学校時代の同級生であると自称するA博士が現われたとしよう。それがA博士であることには間違いがないとしよう。そして、このA博士は実際に私の小学校時代の同級生のA君であるが、私は、このことを知らず、「A博士はA君でないかも知れない」あるいは「A君はA博士でないかも知れない」と考えたとしよう。このような場合、「A博士」も「A君」も固定指示表現であるとすれば、クリプキに従えば、A博士がA君であることは必然的であることになり、A博士がA君でないことも、A君がA博士でないことも、不可能であり、想像できないことになる。従って、私
が実際に想像しているのは、「A博士がA君でない」ということがあり得た」ということでなくて、「このA博士と区別できない或る別人がいて、それがA君でない」ということがあり得た」ということ、すなわち、「A君でない或る人が、今ここにいるA氏とまったく同じ現われ方をする別人である」ということがあり得た」ということであることになる。

しかし、このような場合、私は、端的に、「今ここにいるA博士」が事実においてそれである人」そのものが、私の小学校時代の同級生のA君「が事実においてそれであった人」そのものと、同一人物でない「ということがあり得た」という「不可能な」ことを、考え想像しているのではないであろうか。実際、最初の仮定とは逆に、もしA博士がA君でなかったとすれば、そのことを知らずに私が「A博士がA君でないかも知れない」と考えるとき、クリプキの議論に従っても、私は、文字どおりに、「A博士」が事実においてそれである人」そのものがA君「が事実においてそれである人」そのものでない

「ということがあり得た」と考えていると言える。A博士がA君であるかないかによって、同じ「A博士がA君でない」とがあり得た」という文で表現される言明が、このように別の意味をもつのであろうか。

「私の小学校時代の同級生であったA君」という表現は、現実の世界においてそのようなA君がただ一人しか存在しなかったとする限り、私の知りうる限りでのA君そのもの（A君が事実においてそれであった人そのもの）を指示しているのであり、各可能的世界について、その世界において私の小学校時代の同級生でありかつ「A」という名前の或る唯一の人（現実世界以外の他の可能的世界においてはそれが誰であるかが分からない或る人）を指示しているとは、思えない。「今ここにいるA博士」という表現も、現実の世界において今ここにいるA博士がただ一人しか存在しないとする限り、私の知りうる限りでのA博士そのもの（A博士が事実においてそれである人そのもの）を指示しているのであり、各可能的世界について、その世界において今ここにいる「A博士」と呼ばれる或る唯一の人（現実世界以外の他の可能的世界においてはそれが誰であるか分からない或る人）を指示しているとは、思えない。もちろん、私が小学校に行かなかったような可能的世界や、A君が存在しなかったような可能的世界が、あり得る。しかしそのような可能世界においても、「A君」が、現実世界において私の小学校の同級生であったA君そのものを指示することは、一般の固有名の場合と同様に可能である（十六節、「アリストテレス」の例を見よ）。「A博士」についても同様である。

二七 以上のわれわれの直観を、痛み「[の内的体験]」とそれに対応するしかるべき脳生理過程の場合に当てはめるならば、痛みとしかるべき脳過程とは、同一の事象であり、従って必然的に同一であり、痛みがしかるべき脳過程を伴わずに生じることも、しかるべき脳過程が痛みを伴わずに生じることも、共に不可能であるとしても、それらの一方が他方を伴わずに生じることは、考え想像することができ、ということになる。その際、「痛み」あるいは「心的事象」は、自然現象を表わ

す一般名辞である「熱」や「光」と同様に、対象を固定的に指示すると見なすことができ、また「脳過程」についても同様である（一九節、また Kripke (1), pp. 162; (2), pp. 148-9)。また、痛みあるいはその他の心的事象は、その本質的な特徴である、痛みの感覚あるいは或る種類の内的体験を伴うということによって、同定されると見なすことができ、脳過程についても同様である（二三節、(4) 項と (5) 項）。従って、心的事象と脳過程が同一の事象であるとすれば、両者は必然的に同一の事象であることになる。それにもかかわらず、一方が他方を伴わずに生じるという、不可能であり誤った考えを、われわれがもつということが、可能であると思われるのである。

この問題について特に注意に価すると思われることは、どのような種類の痛みにどのような種類の脳の状態（あるいはむしろ全身の状態）が対応しているかを、われわれ（少なくとも私）が未だよく知らないということである。従って、われわれの心身同一説、正確に言えば、心的事象を、内的体験的側面と外的身体的側面の二側面をもつ、単一で同一の事象とする説は、「内的に体験される^①どの種類の心的事象も、或るしかるべき種類の身体的状態と同一の事象である」という、弱い（緩い）主張である。内的体験と身体的状態との間の対応は、経験的に（アポステリオリに）しか知られない。そして、われわれは、経験的にしか知られないような事柄については特に、少くともそれを知るまでは、事柄の肯定と否定の両面を考えるのである。^①しかし、もしわれわれが、或る種類の心的状態「内的側面」が或る種類の身体的過程と同一であることを知り、個々の心的事象「内的側面」と同一の事象である個々の身体的過程を知るに至るならば、それらがたがいに同一の事象であること、従って必然的に同一の事象であることに、疑念を挟むことがなくなるであろう。

註

(1) David Hume, *A Treatise of Human Nature*, Bk. 1, Pt. 3.

Sect. 8, p. 95 を見よ。

二八 クリップキの考えによれば、或ること (p ということ) が必然的であるならば、その否定 (¬p ということ) は不可能であり、可能であるのは、そのこと (¬p であるということ) ではなくて、そのことと認識の上で (質的に) 区別できないような、或る他の事態である。

しかし、或ること (p ということ) が必然的であるならば、われわれがその否定 (¬p ということ) が可能であると考え、(conceive) とき、われわれは、不可能で間違ったことを考えているのである。われわれは、不可能なことを考えることがあるのである。

われわれが「宵の明星が明けの明星である」ということを知らないとき、われわれは、「宵の明星が明けの明星でない」と考えることがあり得、われわれは、このことを、宜の明星そのものと明けの明星そのものについて考えているのである。そのときわれわれが指示している対象は、宵の明星そのものと明けの明星そのものである。

われわれは、痛みやその他の心的事象を、或る種類の身体的過程であると信じ主張しているが、それらがどのような種類の身体的過程であるかを、未だ知らない。そこでわれわれが、「心的事象が身体的過程と同一の事象でない」「かも知れない」という、不可能で間違っているかも知れないことを、想像することがあり得る。しかし、われわれがそのように想像するとき、われわれは、やはり心的事象と身体的過程を固定的に指示しているのである。

クリプキが、痛みがしかるべき脳過程なしに生じたり、しかるべき脳過程が痛みなしに生じたりするという、「見かけの可能性」(それらのことが可能であるという「感じ」や「直観」)(2), pp. 149, 151, 148) と呼ぶものは、「形而上学的な」可能性と思考(想像)の可能性との曖昧な同一視を含んでいると思われる。

われわれが提案するのは、心的事象「[内的側面]」としかるべき身体的過程の同一性の予想される必然性にもかかわらず痛みがしかるべき脳過程なしに生じ得るかのように見えるという、見かけの可能性は、心的事象と身体的過程の間の非同一

性の子想される不可能性にもかかわらず、心的事象がしかるべき身体的過程なしに生じるといいうことが、思考(想像)可能であり、従って有意味である」ということに基くというものである。

(未完)

参考文献

- Block, Ned, (ed.), *Readings in Philosophy of Psychology*, Vol. 1, 1980 (Harvard U. P.).
- Bower, T. G. R., (1) *A Primer of Infant Development*, 1977 (Freeman and Co.).
- (2) *Human Development*, 1979 (Freeman and Co.).
- Davidson, D., (1) *Essays on Actions and Events*, 1980 (Oxford U. P.).
- (2) "Actions, Reasons, and Causes", 1963, in (1).
- (3) "Mental Events", 1970, in (1) and Block (ed.).
- (4) "Psychology as Philosophy", 1974, in (1).
- (5) "Causal Relations", 1967, in (1).
- Descartes, R., (1) *Meditationes de prima philosophia* (1641): *Oeuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam et P. Tannery, 1964 (J. Vrin), Tome VII.
- (2) *Meditations* (1647): Adam et Tannery (ed.), Tome IX-1.
- (3) *The Philosophical Writings of Descartes*, Translated by J. Cottingham, R. Stoothoff, and D. Murdoch, 1985 (Cambridge U. P.).
- Gibson, J. J., (1) *The Senses Considered as Perceptual Systems*, 1968 (George Allen and Unwin).
- (2) *The Ecological Approach to Visual Perception*, 1979 (Houghton Mifflin).
- Hughes, G. E., and M. J. Cresswell, *An Introduction to Modal Logic*, 1968 (Methuen and Co.)
- Hume, D., *A Treatise of Human Nature* (1739-40), edited by P. H. Niddich, 1978 (Oxford U. P.).
- Hochberg, J. E., *Perception*, Second Edition, 1978 (Prentice-Hall) :
- 上村和子訳「ホッホミュー『知覚』一九八一年(岩波書店)。
- Kant, I., *Kritik der reinen Vernunft* (1781, 1787), herausgegeben von R. Schmidt, 1956 (Felix Meiner Verlag).
- Kenny, A., *Descartes, A Study of His Philosophy*, 1968 (Random House).
- 木曾好能「直接知覚か非知覚か」一九八二年(日本哲学会『哲学』三三(一))。
- Kripke, S., (1) "Identity and Necessity", 1971, in *Identity and Individuation*, Edited by M. K. Munitz, 1971 (New York U. P.).
- (2) *Naming and Necessity* (1972), 1980 (Basil Blackwell).
- Lewis, David, (1) *Philosophical Papers*, Volume I, 1983 (Oxford U. P.).
- (2) "An Argument for the Identity Theory", 1966, in (1).
- (3) "Psychophysical and Theoretical Identifications", 1972, in Block (ed.).
- (4) "Mad Pain and Marian Pain", 1980, in (1) and Block (ed.).
- Locke, J., *An Essay concerning Human Understanding* (1690), edited by P. H. Niddich, 1975 (Oxford U. P.).
- Melzack, R., "The Perception of Pain", in *Scientific American*, February 1961.
- Rock, I. and Ch. S. Harris, "Vision and Touch", in *Scientific American*, May 1967.
- Routtenberg, A., 「脳の報酬系と記憶」 柴田栄三譯『認知科学』一六(一)号(四葉キヤムハク) : "The Reward System of the Brain", in *Scientific American*, November 1978.

- Russell, B., *An Inquiry into Meaning and Truth*, 1940 (George Allen and Unwin).
- Russell, James, *Explaining Mental Life*, 1984 (MacMillan Press).
- Sartre, J.-P., *L'être et le néant*, (Gallimard) : 松波信三郎訳、サルトル『存在と無』一九八五年（人文書院）。
- Shaffer, J. A., *Philosophy of Mind*, 1968 (Prentice-Hall).
- Shoemaker, S., "Functionalism and Qualia", 1975, in Block (ed.).
- Strawson, P. F., "Persons", in *Concepts, Theories, and the Mind-Body Problem*, Edited by H. Feigl, M. Scriven, and G. Maxwell, 1958 (University of Minnesota P.).
- Williams, B., (1) *Descartes, The Project of Pure Inquiry*, 1978 (Penguin Books).
- (2) "Are Persons Bodies? ", 1970: *Problems of the Self*, 1973 (Cambridge U. P.), ch. 5.

What Is Mind? (Part Two)

Yoshinobu Kiso

(“What Is Mind? ” was originally written in Japanese and its First Part was not translated into English, but this *partial* translation of its Second Part contains a detailed summary of the main contentions made in the First Part as well as their reconsiderations so that the readers need not read Part One of this article in Japanese. For this reason, however, I have had to make a considerably free and amplified translation of the first and second chapters of Part Two of the Japanese version.)

§ 1 In this article, we would like to maintain a double-aspect type of mind-body identity theory, that is, a thesis which asserts that a mental phenomenon is essentially a single phenomenon which consists of both an internally experiential aspect and an external physical or physiological aspect in the person who has the internal experience, and that the internal aspect cannot be reduced to the external physical aspect. We should expect an immediate objection which would say that the double-aspect theory can only temporarily put off the difficulty of mind-body dualism, for the aforesaid inner and outer aspects might be nothing but the recurrence of the two ontological domains of mind and body. Moreover, the internal aspect of a mental phenomenon might turn out to be a mere epiphenomenon or non-causative by-product of the external physical aspect of it. But although at the present stage of my knowledge about mental states I am not prepared to consider this objection, the double-aspect theory seems to be the most plausible hypothesis about the relation of mind and body in the sense that it seems to

be able to accommodate both fundamental everyday mental experiences and scientific facts about the mental phenomena.

In Part One, we tried to maintain such a double-aspect theory by examining Cartesian dualism, P. F. Strawson's concept of a person, Bernard Williams's objection to Strawson, David Lewis's version of functionalism, R. Davidson's anomalous monism, and James Russell's psychological monism.

Chapter I Cartesian Dualism and Strawson's Concept of a Person

§ 2 Descartes's dualism⁽¹⁾ or doctrine of *distinctio realis* between mind and body asserts that *I* or *my* mind is a substance whose essence lies only in thinking and whose existence is independent of that of all bodies including *my* body. We object that although we may not need to *think of* any body in order to *know* that *I* think, this does not imply that the *actual occurrence* of *my* thinking does not need the *actual existence* of my body. Our objection to Descartes is essentially the same as those made by A. Arnauld and A. Kenny.⁽²⁾ The question of whether *my* mind can *actually* exist without any body cannot be determined by *my* thinking or mere facts of consciousness which involve only epistemic or semantic relations between the *concepts* of mind and body. In general, logical, semantical, or epistemic distinction (difference or independence) between two things does not imply their *distinctio realis* or the actual mutual independence of their existences. And it seems that the overwhelming majority of empirical facts suggest that the subject of mental acts is not a mere mind but an embodied human being.

(1) Descartes, *Meditationes de prima philosophia: Œuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam et P. Tannery, Tome VII, p. 78; *Méditations*: Adam et Tannery (ed.), Tome IX-1, p. 62.

(2) A. Arnauld, "Objectiones Quatrae", Adam et Tannery (ed.),

Tome VII, pp. 199, 201 ; “Quatrièmes Objections”, Adam et Tanney (ed.), Tome IX-1, pp.155,157. A.Kenny, *Descartes, A Study of His Philosophy*, 1968, Random House, p.89.

§ 3 P.F.Strawson's objection⁽¹⁾ to Decartes is that *I* am not a mere mind but a “person” with inner and outer aspects. I understand Strawson's thesis as one which asserts that we need not ascribe private states of consciousness to anything because they are necessarily mine, that the need to ascribe a state of consciousness to myself occurs only when I need to state that that state of consciousness is not some other person's, and that in this latter case the state of consciousness is regarded as an *objective* event which might possibly belong to other persons. If we accept Strawson's thesis as it seems we should, a person can ascribe a state of consciousness or an experience to himself only when he is prepared to ascribe that kind of mental states to other persons.

Strawson calls those predicates which can be truly applied to persons and ascribe actions, intentions, and cognitive acts to them “P-predicates” (person predicates). P-predicates do not necessarily ascribe states of consciousness, but imply that the individuals to which they apply have consciousness. P-predicates are said to have “the unique logical character” in that they essentially have both the first-person use and the third-person use, that the speaker can apply them to himself without observation of his own behaviour (but often perhaps in virtue of some internal experiences) and to others in virtue of observation of their behaviour, and that both their first-person use and their third-person use ascribe the same kind of characteristics with equal logical adequacy. Strawson argues that P-predicates essentially have both the self-ascriptive use and the other-ascriptive use and that this fact cannot be explained in terms of either the third-person use of M-predicates (material-object predicates),

the necessarily impersonal use of predicates which describe purely private experiences, or the combination of both. The concept of a person is said to be "primitive" and not to be analyzed in any way.

- (1) P. F. Strawson, "Persons", in *Concepts, Theories, and the Mind-Body Problems*, edited by H. Feigl, M. Scriven, and G. Maxwell, 1958, University of Minnesota Press.

§ 4 Although we can agree with Strawson's assertion that our concept of a person is unique and *sui generis*, we soon become puzzled by the natural question of how we could learn such a unique concept; the more puzzled, the more unique the concept is. What Strawson has shown to be unique is a *perfected* concept which we average adults have. Are babies born with such a perfected concept of a person in their mind? We are forced to consider even if only speculatively the genetic processes of the concept of a person or the learning processes of P-predicates in a child.

First of all, we must assume that the infant is able natively to distinguish between the external world or external objects, which are the objects of his external senses or perceptual systems, and his own body, which is internally felt as the object of his proprioceptive systems which include both somatic perception and kinaesthesia. I should like to call the internally felt body "the internal body" or "the inner body". The internal body is, as it were, the internal place where pain may occur. At this stage of development, the infant need not have any mental act to ascribe what is perceived to anything, because what is perceived externally is logically regarded as an external object which belongs to the external world in mere virtue of being perceived by external senses and what is perceived internally is logically regarded as a state of the *impersonal* internal body in mere virtue of being perceived internally. At this stage of development, the only significant question is which object appearing

to one external sense (e. g., touch) is to be identified with which object appearing to another external sense (e. g., vision).

But one's body is not only internally perceptible but also one of the externally perceptible objects; we see and touch our own limbs and other parts of our body. The infant will, therefore, soon come to identify one of the external objects with his own but still impersonal internal body. We may call this external object which is identified with his internal body "the external body" or "the outer body", and the single body which consists of both the external and internal aspects "the single unified body". This factual identification will be actualized by the information of the covariant correlations between the felt movement of one part of his internal body and the externally perceived motion of one part of his external body. One example of this identification of the internal body and the external body seems to be observed in the famous activity⁽¹⁾ of "hand regard" of the newborn, which is reported by T. G. R. Bower to have occurred even in 12-day old infants. Another example may be the covariant correlations between the internally felt touch between one part of the internal body and an externally felt object on the one hand and the seen touch between the seen part of one's body and the seen external body. At this stage of development of the infant there is needed, and does occur, for the first time, the mental act of ascribing *impersonal* internal experiences to one of the external objects which happens to be his external body.

At this stage when the infant hears a P-predicate (e. g., "Ouch! " or "That hurts! ") being applied to the whole consisting of an internally felt state of his internal body (a painful state) and an externally observable state (an injury) and behaviour of his external body, he will associate the P-predicate with the whole complex of the simultaneous internal and external experiences, or rather with its most prominent part (the internal experience of pain). Even at this

stage the P-predicate is associated with the particular kind of *impersonal* internal bodily state and the state of the external object (the infant's external body) which is identified with it. But the infant has already acquired the concept of the single unified *impersonal* body with its inner and outer aspects.

But concurrently with this the infant will hear the same P-predicate being applied to the same kind of external state or behaviour of the external objects of the most conspicuous kind, which are in fact the bodies of the person taking care of him or other adults, and associate the predicate with the state of the external objects, which is like that of his own external body but is not accompanied by any felt internal experience, and imagine the state to be accompanied by the same kind of internal experience (e. g., a pain) in virtue of the already established association of the predicate with the particular kind of his own impersonal internal experiences. When the infant has thus come to imagine that certain external objects other than his own impersonal body are accompanied by internal experiences, he will begin to distinguish between his own body as *himself* and these other external bodies as *others*, and therefore begin to form the concept of persons which include himself and other selves. At this stage of development P-predicates will stop merely applying logically to his own impersonal internal body and factually to the unique external object which is identified with it, but begin factually to apply to not only himself or his own body but also other persons or other persons' bodies. This means that P-predicates acquire both the first- and the third-person uses which are both *objective* in the sense that they can be applied "equally adequately" to oneself and other selves both of which are objective beings coexistent and distinguishable in the objective external world.

Now since internal or external events themselves mentioned in the processes of this speculated development of the concept of a

person do not seem to change during the development and only the infant's ways of viewing the same events change during the development, from the point of view wise after the event, P-predicates have had from the beginning as the cues of their application both the internally felt first-person experiences and the externally observed third-person bodily states, both of which are *objective* events. P-predicates, and accordingly the concept of a person too, *are* analyzable in this way by means of genetically epistemological considerations in spite of their "primitiveness" in the perfected conceptual system of adults. The application of a P-predicate means for the time being only the realization of an objective internal experience which is the internal cue of its application, but if some external bodily state (perhaps not merely neural states of the brain, but the whole of bodily states including neural states) comes to be identified with the internal experience, it can in reality also mean the realization of the external bodily state.

- (1) T.G.R. Bower, *A Primer of Infant Development*, 1977, Freeman and Co., pp. 75-6, 91-4 ; *Human Development*, 1979, Freeman and Co., pp. 101-2.

Chapter II Facial Imitation in babies and the adult concept of a person

§ 5 There is another fact to be considered in relation to this kind of analysis of person predicates and the concept of a person. That is the fact that neonates less than a week old imitate the motions of the face of the person taking care of them. This fact is described by T.G.R. Bower as follows :

... there is a whole literature on processes of socialization, a literature devoted to discussing how the baby comes to be socialized, how he comes to realize that he is a human being, how he

comes to have special sets of responses to people that are not elicited by anything else in his environment. *A great deal of this effort*, although not all of it, has, I feel, been *wasted*, because *right from the moment of birth the baby realizes he is a human being* and has specific responses elicited only by other human beings.

One of the more spectacular demonstrations of this is the fact that babies less than a week old will imitate other people. If the baby's mother, or some other adult, sticks out her tongue at the baby, within a relatively short time the baby will begin to stick his tongue back out at her. Suppose she then stops sticking her tongue out and begins to flutter her eyelashes; the baby will flutter his eyelashes back. If she then starts to open and close her mouth, for example, the baby will begin to open [and close] his mouth in synchrony. . . .

. . . It seems to me there must be an incredible amount of built-in intersensory mapping for the baby to be able to look at an adult sticking out her tongue and transform this information so that he *knows*, in this social situation, he should stick his tongue out in return. The same thing goes for any of the imitations involving the face. . . .

. . . The responses are quite specifically directed toward human beings and seem to be testimony that the newborn *considers himself human* too. He somehow *knows* that his face is like the adult face he sees before him, and that his mouth is like the adult mouth he sees before him.

. . . It is not an operant behavior, in the sense that babies do not imitate their mothers in order to get the mothers to do other things for them. The behavior seems to be satisfying in and of itself. The mother and baby interact for the sake of interacting. It is for this reason that I refer to it as a social be-

havior. . . .⁽¹⁾

- (1) T.G. R. Bower, *A Primer of Infant Development*, pp. 28–30; Cf. *Human Development*, Ch. 14, pp. 304–5. The Italics are mine.

§ 6 Was our analysis of person predicates and the concept of a person wasted as Bower says? I do not think so, because we can take our speculated developmental processes towards the acquisition of the concept of a person not as the actual genetic processes of the ability to apply person predicates but as the models of possible ways of processing the perceptual cues or information which is actually given and exploited when we apply person predicates. That is, there could be other conceptual systems than the one we actually have; corresponding to the speculated developmental processes there could be the conceptual system which consists of the impersonal internal body and the world of external objects, the system which consists of the single unified impersonal body and other external objects, and the system which consists of the first-person body, third-person bodies, and the other external objects, the last system being the one we actually have. By this reinterpretation of our speculative genetics of the concept of a person, we can see what our actual conceptual system presupposes.

§ 7 Another thing to be considered is the meaning of such words as “realize”, “know”, and “consider” which Bower applies to the newborn, for the facial imitations of babies might be taken to be mere reflexive responses which are elicited only by other human beings. But if we take them, as it seems we should, to be merely reflexive responses specific to other human beings, we seem to be naturally faced with the genetic question of how such reflexive responses develop into voluntary or conscious imitative behaviour patterns.

About this question we may be allowed to think that the imitative behaviours in the newborn, even if they are merely reflexive, are accompanied by internal bodily experiences as well as neuro-physiological processes and that in these internal experiences and physiological processes is already contained perceptual information or cues which he will be able to use in his later voluntary imitations. The infant may not be able now to distinguish and extract this information from among all the stimuli now being given to him, but it is already provided among them nonetheless. What the infant gradually learns seems to be the distinction and differentiation⁽¹⁾ among stimulus information which has constantly been given from the beginning. But in order to differentiate and process the stimulus information, it seems that there is a need for some conceptual system even if it is only a provisional one. The conceptual systems to be presupposed might be various, but the infant eventually acquires the conceptual system which we adults have and which includes the perfected concept of a person. The infant seems to have an innate ability to acquire or choose that conceptual system. This ability may at first appear as reflexive responses of facial imitation. These reflexive responses are accompanied by internal experiences and physiological processes, which contain the perceptual cues or information for later voluntary imitations. Being continually exposed to this kind of stimulus information along with other proper stimulations, including verbal ones, given at proper times, the infant will gradually acquire the ability voluntarily to imitate movements of other persons recognizing them as movements of fellow beings along with the ability to apply person predicates, and finally acquire the perfect concept⁽²⁾ of a person.

- (1) J. J. Gibson, *The Senses Considered as Perceptual Systems*, 1968, George Allen and Unwin, p.269; *The Ecological Approach to Visual Perception*, 1979, Houghton Mifflin, pp.252-4.

(2) By “the perfect concept of a person” I mean the concept of a person which an average adult has. The concept of a person, or any other concept for that matter, which an individual person has will continue to develop or change all his life according to his experiences.

§ 8 At first we considered speculatively the genetic processes of acquisition of person predicates and the concept of a person, and suggested a way of analysis of the concepts of a person and person predicates (§ 4). Next, being faced with the empirical fact of facial imitations in newborns (§ 5), we reinterpreted the speculative inquiry into the genesis of the concepts as a static conceptual analysis (§ 6). But being faced with the possibility of interpreting the babies’ imitative behaviours as merely reflexive responses specific to other human beings, we have returned to a speculative genetic inquiry (§ 7). These movements of our argument may seem to be a train of arbitrary prevarications.

But what does philosophical conceptual analysis intend to achieve? Of what significance is philosophical analysis of a concept, if it does not reveal anything correspondent to the presuppositions of the concept and its relations with other concepts in the stages of the actual development of human cognition? But philosophical conceptual analysis is an analysis of relations between concepts in the *perfected* conceptual system which average adults have. And the relation of implication or presupposition between two concepts does not seem necessarily to imply that the implied or presupposed concept should be acquired before, or at the same time as, the implying or presupposing concept. Can we say, for example, that the concept of an animal should be learned before or at the same time as the concept of man because it is logically true that man is an animal? Of course not. It is possible that an infant grows into an adult and

acquires a concept of man without seeing any other animal than human beings. His concept of man is imperfect seen from the viewpoint of our conceptual system, and he is, as it were, stopped on the way to the acquisition of the perfect concept of man. But in acquiring even his imperfect concept of man, he has to acquire the knowledge of how man looks and how man behaves, which is essentially presupposed by the concept of man. Now in this knowledge is contained in a latent form the knowledge of how a higher animal other than human beings looks and behaves. That is, if the infant had met other animals as well as human beings, he could have acquired the concept of an animal in the very process of acquiring the concept of man.

And the concept of a person essentially presupposes the distinction between internal experiences and external objects, the distinction between the unified body consisting of the internal body and an external body, and the distinction between the first-person body (oneself) and third-person bodies (other selves) and between persons and other things. These conceptual abilities should be used or acquired in the very process of acquiring the concept of a person.

Thus it seems that the most essential relations among concepts in the perfected adult conceptual system are reflected in the genetic processes of acquiring the concepts, and that the former can be static models of the dynamism of the latter. If they cannot, philosophical analysis of *perfected* concepts of average adults would be of no significance except as a snapshot of ourselves frozen at one instant.

§ 9 And what does the genetic inquiry into concepts on the other hand intend to achieve? The genetic inquiry into concepts of the kind we made in § 4 and § 7 intends to *understand* the actual processes of acquisition of concepts *from the viewpoint of the perfect-*

ed conceptual system which an average adult has. If we could take it for granted that infants command voluntarily the same conceptual system as adults do, there would be no question to ask and no need of any genetic consideration. Idealism of the sort⁽¹⁾ which asserts that a transcendental subject by itself makes possible the fundamental presuppositions of empirical knowledge, and that it constructs its objects a priori from internal representations by its own plan alone and without any help of experience, is of no epistemological significance. For even an a priori concept must be applicable to an actually experienced particular kind of object, and in order for it to be applicable to actual objects there needs to be given and used here and now a particular kind of perceptual cue or information which requires us to apply that particular concept to them. In order for this to be possible we must be able to distinguish and extract that particular kind of perceptual information from among the whole of concurrent stimulations and to process and interpret it. And this presupposes that we already have some conceptual system to guide us.

Now many cognitive or social behaviours of infants seem to be not voluntary or conscious but reflexive responses. But if these seemingly reflexive responses of infants do not have any connection with their later voluntary behaviours, we shall have little prospect of understanding how and when voluntary actions and behaviours are made possible for infants. The native conceptual system of the newborn seems to be a mechanism which makes his reflexive responses possible and which will gradually grow into a later voluntary conceptual system by means of the perceptual information which is being given by these reflexive responses internally or physiologically (§ 7). Therefore, we have to construct a series of conceptual systems seemingly presupposed by the perfected adult conceptual system, see if each of them applies to each stage of the

infant's learning of a concept, and try to *experience vicariously* what the infant is going through. Thus a genetic inquiry into a concept needs a static construction of possible conceptual systems as the models of the stages of the actual genesis of the concept. This is the reverse side of what was said in § 6. A significant epistemology should be one which tries *concretely to imagine* the processes of actual genesis or development of concepts in human beings by taking as their models those possible conceptual systems which can be known by the analysis of concepts which average adults have.

(1) I have Kant's *Kritik der reinen Vernunft* in mind.

(To be continued)